南アルプス市埋蔵文化財調査報告書　第39集

山梨県南アルプス市

Yagosima　・　Isibasiiseki

野牛島・石橋遺跡

南アルプス市野牛島2695番１他宅地造成工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１５．３

南アルプス市教育委員会
株 式 会 社 タ ッ プ

YAGOSIMA・ISIBASI SITE EXCAVATION REPORT

南アルプス市埋蔵文化財調査報告書　第三九集　野牛島・石橋遺跡

二〇一五・三　南アルプス市教育委員会・株式会社タップ

南アルプス市埋蔵文化財調査報告書　第39集

山梨県南アルプス市

Yagosima　・　Isibasiiseki

野牛島・石橋遺跡

南アルプス市野牛島2695番１他宅地造成工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１５．３

南アルプス市教育委員会
株式会社タップ

YAGOSIMA・ISIBASI SITE EXCAVATION REPORT

例　　言

1．本報告書は、山梨県南アルプス市野牛島2695番1、2698番、2699番1に計画された宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本発掘の調査主体は南アルプス市教育委員会であり、調査は斎藤秀樹（南アルプス市教育委員会文化財課）が担当した。

3．発掘調査期間は平成25年10月16日～11月11日である。

4．本書の執筆・編集は斎藤が行った。

5．調査で得られた出土遺物およびすべての記録は、南アルプス市教育委員会に保管してある。

6．試掘調査から報告書作成まで、次の諸氏、諸機関にご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意としたい。（敬称略・五十音順）

閏間俊明、三枝幹男、畑　大介、公益財団法人山梨文化財研究所

凡　　例

1．工事範囲は南アルプス市埋蔵文化財包蔵地野牛島･石橋遺跡（HT － 18）および野牛島･大塚遺跡（HT － 19）に該当するが、本調査地点は野牛島・石橋遺跡のため書名を野牛島・石橋遺跡とした。

2．遺構および遺物の実測図の縮尺は、それぞれ図に明記しているが、原則として以下のとおりである。

（1）遺構　　竪穴建物・・・・・・・1/40
　　土坑・・・・・・・・・・1/20・1/40
　　溝状遺構・・・・・・・1/40

（2）遺物　　土器・・・・・・・・・・1/3
　　鉄製品・・・・・・・・・2/3
　　銅銭・・・・・・・・・・1/1

3．遺構図中で使用したスクリーントーンおよび遺物分布図におけるドットの凡例は以下のとおりである。

（1）スクリーントーン

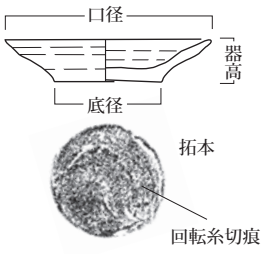
焼土　　炭化物

（2）遺物分布図におけるドットは次の遺物を表す。

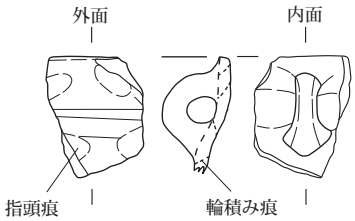
土器・・・・・・・●
古銭・・・・・・・★

4．遺構断面図、エレベーション図における数値表示は標高を表す。

5．土器の実測図の表現は、以下のとおりである。破片資料の場合、断面図の左側に外面を、右側に内面を描き表現した。



土師質小皿



土師質内耳鍋

6．挿図中の遺物番号、遺物観察表、写真図版の遺物番号はすべて一致している。

目　次

例　言
凡　例
目　次
第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過 ―― **1**
第１節　調査に至る経緯 ―― 1
第２節　発掘作業の経過 ―― 1
第３節　整理等作業の経過 ―― 2
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 ―― **3**
第１節　地理的環境 ―― 3
１．御勅使川と御勅使川扇状地
２．野牛島・石橋遺跡周辺の地形
第２節　歴史的環境 ―― 4
１．御勅使川扇状地北部の歴史環境
第Ⅲ章　調査の方法と成果 ―― **10**
第１節　調査の方法 ―― 10
第２節　層序 ―― 10
第３節　遺構と遺物 ―― 12
１．竪穴建物
２．溝状遺構
３．土坑
第Ⅳ章　自然科学分析 ―― **22**
第１節　樹種同定および組織観察 ―― 22
第２節　出土人骨 ―― 24
第Ⅴ章　総括 ―― **28**
第１節　土坑墓 ―― 28
第２節　竪穴建物と野牛島集落の変遷 ―― 28
第３節　調査の成果と課題 ―― 30
図　版

表　目　次

第１表　土坑計測表（第５・９・10 図）
第２表　土器観察表（第 11 図）
第３表　鉄製品観察表（第 11 図）
第４表　古銭観察表（第 11 図）
第５表　御勅使川扇状地上で検出された土坑墓一覧

挿 図 目 次

第１図　開発計画図および遺構の保存範囲（1/1,000）
第２図　御勅使川扇状地地形分類図および遺跡分布図（1/25,000）
第３図　野牛島・石橋遺跡周辺の地形分類図および主要遺跡分布図（1/8,000）
第４図　基本層序柱状図（1/20）
第５図　野牛島・石橋遺跡全体図（1/150）
第６図　１号竪穴建物平・断面・エレベーション図（1/40）
第７図　２号竪穴建物平・断面図（1/40）
第８図　１号・２号・３号溝状遺構平・断面・エレベーション図および遺物分布図（1/40）
第９図　土坑平面・エレベーション図および遺物分布図（1/20）
第 10 図　土坑平・断面・エレベーション図（1/40）
第 11 図　出土遺物（1/1・2/3・1/3）
第 12 図　野牛島・石橋遺跡周辺の集落変遷（1/5,000）

写真図版目次

写真図版１
１．遺構確認状況（南から）
２．調査区全景（北から）
３．調査区全景（南から）
写真図版２
１．１号竪穴建物、１・２号溝状遺構、１・２号土坑（西から）
２．１号竪穴建物、１・２号溝状遺構、１・２号土坑（北から）
３．１号竪穴建物カマド（西から）
写真図版３
１．１号竪穴建物カマド断面（北から）
２．１号竪穴建物ピット１（南から）
３．１号竪穴建物焼土
写真図版４
１．１号竪穴建物、１・２号溝状遺構全景（東から）
２．11号土坑（南から）
３．11号土坑焼土、炭化物
写真図版５
１．１・13・14号土坑
２．１号土坑断面（西から）
３．２号土坑
写真図版６
１．調査区北部（南から）
２．２号竪穴建物、３号溝状遺構、３・４・５号土坑（西から）
３．３・４・５号土坑（東から）
写真図版７
１．３号土坑
２．３号土坑底面炭化物検出状況
３．４号土坑
写真図版８
１．５号土坑
２．５号土坑（西から）
３．５号土坑銅銭および植物遺体出土状況
写真図版９
１．６号土坑
２．６号土坑
３．６号土坑銅銭および植物遺体出土状況
写真図版 10
１．２号竪穴建物
２．９号土坑
３．７・８号土坑（西から）
写真図版 11
１．４・５号溝状遺構（西から）
２．４・５号溝状遺構（東から）
３．４号溝状遺構遺物出土状況（東から）
４．５号溝状遺構（東から）
写真図版 12
１．４号溝状遺構遺物出土状況
２．４号溝状遺構（西から）
３．32号土坑（北から）
写真図版 13
１～３．調査風景
写真図版 14
１～３．調査風景
写真図版 15
１～３．出土遺物（土器・鉄製品・銅銭）

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

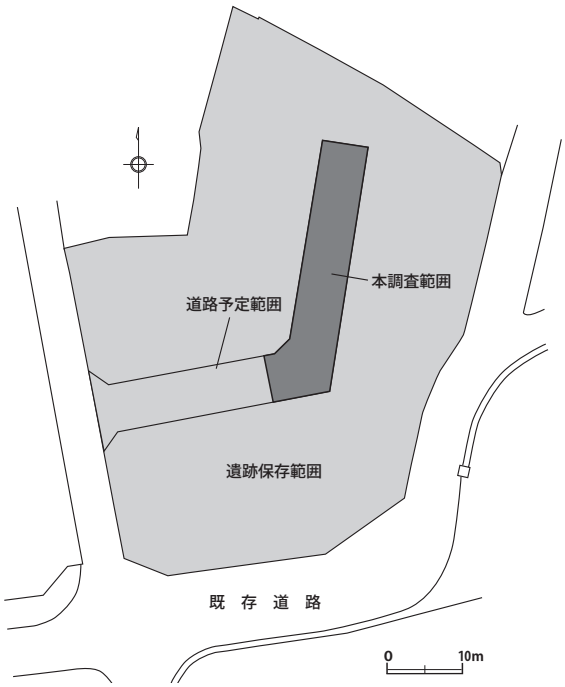
第１節　調査に至る経緯

株式会社タップ代表取締役橋爪正利氏（以下工事主体者）によって南アルプス市野牛島２６９５番１、２６９８番、２６９９番１に宅地造成工事が計画され、平成25年５月工事主体者によって埋蔵文化財包蔵地の照会が南アルプス市教育委員会（以下市教委）に行われた。当該地は南アルプス市埋蔵文化財包蔵地野牛島・石橋遺跡（HT－18）および野牛島・大塚遺跡（HT－19）に位置する。そのため文化財保護法第93条に従い、平成25年５月28日付けで工事主体者から市教委を経由して山梨県教育委員会（以下県教委）へ関係書類が提出された。また平成25年５月28日付けで、工事主体者から市教委へ埋蔵文化財試掘・確認調査（以下試掘調査）の依頼があった。この依頼を受け市教委が試掘調査を実施することとし、土地所有者承諾の上で、平成25年７月29日～８月１日に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、溝状遺構や土坑等を検出した。なお、平成25年６月17日付け、教学文第107号にて試掘調査の実施が、県教委から工事主体者へ通知されている。

試掘調査結果を踏まえ、市教委と工事主体者で埋蔵文化財の保存について協議を行った。住宅部分は、山梨県埋蔵文化財事務取扱要項の「別表２記録保存のための発掘調査を要する場合の基準」で定める遺構確認面と掘削面との間に30cm以上の保護層を設け遺構に影響が及ばない工法のため、発掘調査対象外とした。一方、分譲住宅地内に計画された道路は道路構造令に準拠した構造であり、上記の山梨県埋蔵文化財事務取扱要項で定める発掘調査を要する範囲に該当するため、市教委と工事主体者との協議の結果、発掘調査を行うことで合意した。発掘調査については、工事主体者から市教委が委託を受け実施することとし、市教委と工事主体者との間で平成25年８月９日協定書を締結した。

第２節　発掘作業の経過

調査前の状況



第１図　開発計画図および遺構の保存範囲（1/1,000）

平成 25 年 10 月 16 日に発掘調査を開始し、平成 25 年 11 月 11 日に発掘調査を終了した。
10 月 16 日（水）　重機による表土掘削。遺構確認。
10 月 17 日（木）　重機による表土掘削。遺構確認。
10 月 18 日（金）　重機による表土掘削。遺構確認。
10 月 21 日（月）　１号竪穴建物、１・２号溝状遺構発掘に着手。
10 月 22 日（火）　１号竪穴建物、１・２号溝状遺構完掘。
10 月 23 日（水）　１号竪穴建物、１・２号溝状遺構全景写真撮影および遺構測量。
10 月 24 日（木）　調査休み。
10 月 25 日（金）　３号土坑等発掘。雨のため出土遺物整理。
10 月 28 日（月）　復旧作業。３号土坑等発掘。
10 月 29 日（火）　雨のため調査中止。
10 月 30 日（水）　復旧作業。３号土坑等発掘。
10 月 31 日（木）　４・５号溝状遺構、4・５号土坑等発掘。
11 月 1 日（金）　４・５号溝状遺構、4・５号土坑等発掘。
11 月 5 日（火）　４・５号溝状遺構、4・５号土坑等発掘。
11 月 6 日（水）　４・５号溝状遺構、６～ 10 号土坑等発掘。全体清掃。4・５号溝状遺構測量。
11 月 7 日（木）　雨のため午前調査中止。午後６～ 10 号土坑発掘。遺構測量。
11 月 8 日（金）　遺構測量。
11 月 9 日（土）　遺構測量。
11 月 11 日（月）　遺構測量。現場撤収作業。

調査組織の体制は以下のとおりである。
調査主体　　南アルプス市教育委員会
調査担当者　斎藤秀樹
作業員　　市ノ瀬政次、小林美佐子、小林素子、桜井理恵、名取　茂、新津かつみ、山村隼人

第３節　整理等作業の経過

整理作業は平成 26 年 4 月 1 日に着手し、遺物の洗浄、注記、接合、復元、実測、トレースおよび遺構図の作成、写真の整理を行い、編集作業後、平成 27 年３月の報告書刊行をもって終了した。整理作業体制は以下のとおりである。
調査主体　　南アルプス市教育委員会
調査担当者　斎藤秀樹
作業員　　市ノ瀬政次、小林美佐子、小林素子、桜井理恵、名取　茂、新津かつみ、山村隼人

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

１．御勅使川と御勅使川扇状地

南アルプス市の北端を流れる御勅使川は、巨摩山地のドノコヤ峠（約 1,518 m）の東麓に源を発し、山地を流下して塩前付近で平地に入り、市の北側を東流して釜無川に合流する、総延長 18.78km の河川である。古くから暴れ川として有名で、巨摩山地の山々を削りながら大量の砂礫を下流へ供給し、甲府盆地西部に東西約 7.5km、南北約 10km、面積約 49k ㎡にわたる御勅使川扇状地を形成している。野牛島・石橋遺跡はこの扇状地の扇端部に立地している。

扇状地は地表の主体が砂礫のため地下水位が低く、水の乏しい乾燥した土地となる。御勅使川扇状地の扇央部に位置する上八田・西野・在家塚・上今井・桃園・吉田・小笠原の集落は、近世から「原七郷」と呼ばれ、「お月夜でも焼ける」と言われるほどの常襲旱魃地域であった。そのため近世での主な生業は木綿や煙草、柿などの畑作が主体で、こうした作物を行商で売る生活様式がこの地域の特徴となっていた。昭和40年代に入ると徳島堰（寛文11年に完成した灌漑水路）の水を利用した畑かんの整備が進み、現在は水はけのよい土地であることを利用してブドウやモモ、サクランボなど果樹栽培が盛んな地域となっている。

こうした扇状地を造りだした御勅使川は、現在でこそ河道が固定されているが、過去に何度も流路の変更を繰り返してきた。現在南アルプス市北部を東西に走る県道甲斐芦安線が、明治 30 年まで御勅使川の流路であったことは広く知られている。かつてこの流路は、地元で「前御勅使川」と呼ばれ、昭和に入り「四間道路」が整備され、その後高度経済成長期の開発の波をうけるまでは県道沿いに旧堤防が残り、付近には家屋も少ないという河川としての面影を色濃く残していた。この前御勅使川は遺跡の分布状況や庄名の研究等から、戦国時代にはすでに流れていたことが確実視されている[註1]。流路上には、運搬されてきた砂礫によって浸食崖が埋め立てられ、下流に小扇状地が形成されており、一定期間、御勅使川の本流であったことがうかがえる（第２図）。

前御勅使川以前の流路については、1969 年に刊行された『白根町誌』で有野から西野を経由し現在の白根高校付近に至るルートがすでに図示されている。1990 年代に入ると市内を南北に貫く中部横断自動車道に伴う試掘調査や航空写真からの研究によって科学的な証拠が提示され、現在では流路の具体的なルートがわかりつつある[註2]。また、百々地区に位置する百々遺跡の発掘調査から、この流路は平安時代から中世にかけて本流があったと推測されており、「御勅使川南流路」と名付けられている[註3]。巨視的に見れば野牛島・石橋遺跡は御勅使川と前御勅使川の間に立地している。

２．野牛島・石橋遺跡周辺の地形

野牛島・石橋遺跡は西から東へ緩やかに傾斜する御勅使川扇状地上に立地しており、標高は西端約 332 m、東端約 324 mを測る。遺跡の北側は東流する御勅使川によって扇状地が侵食され、段丘状の崖線が形成されている。

野牛島・石橋遺跡の北側には、平成 19 年に工場建設に伴う大規模造成工事が行われるまで東西にのびる浅い谷が形成されていた。これは御勅使川の旧流路で、大塚遺跡および野牛島・西ノ久保遺跡[註4]の中央部で確認された流路跡から続いており、遺跡の北東に位置する仲田遺跡を埋積して沖積低地上に小扇

状地を形成している。野牛島・石橋遺跡はこの谷の右岸の扇状地上に立地している。

遺跡の北東には韮崎火山岩屑泥流を基盤とする台地が見られる。地元で「赤山」と呼ばれるこの台地は、現在御勅使川によって分断されてはいるが、御勅使川左岸に位置する竜岡台地の一部であり、竜岡台地の南端である。韮崎火山岩屑泥流は発掘調査区にも広がっており、調査区北側では表土直下にこの層が堆積している状況が確認できた。

第２節　歴史的環境

１．御勅使川扇状地北部の歴史環境

本遺跡（1）が位置する御勅使川扇状地北部地域の歴史環境について時代を追いながら見ていきたい（第２図）。

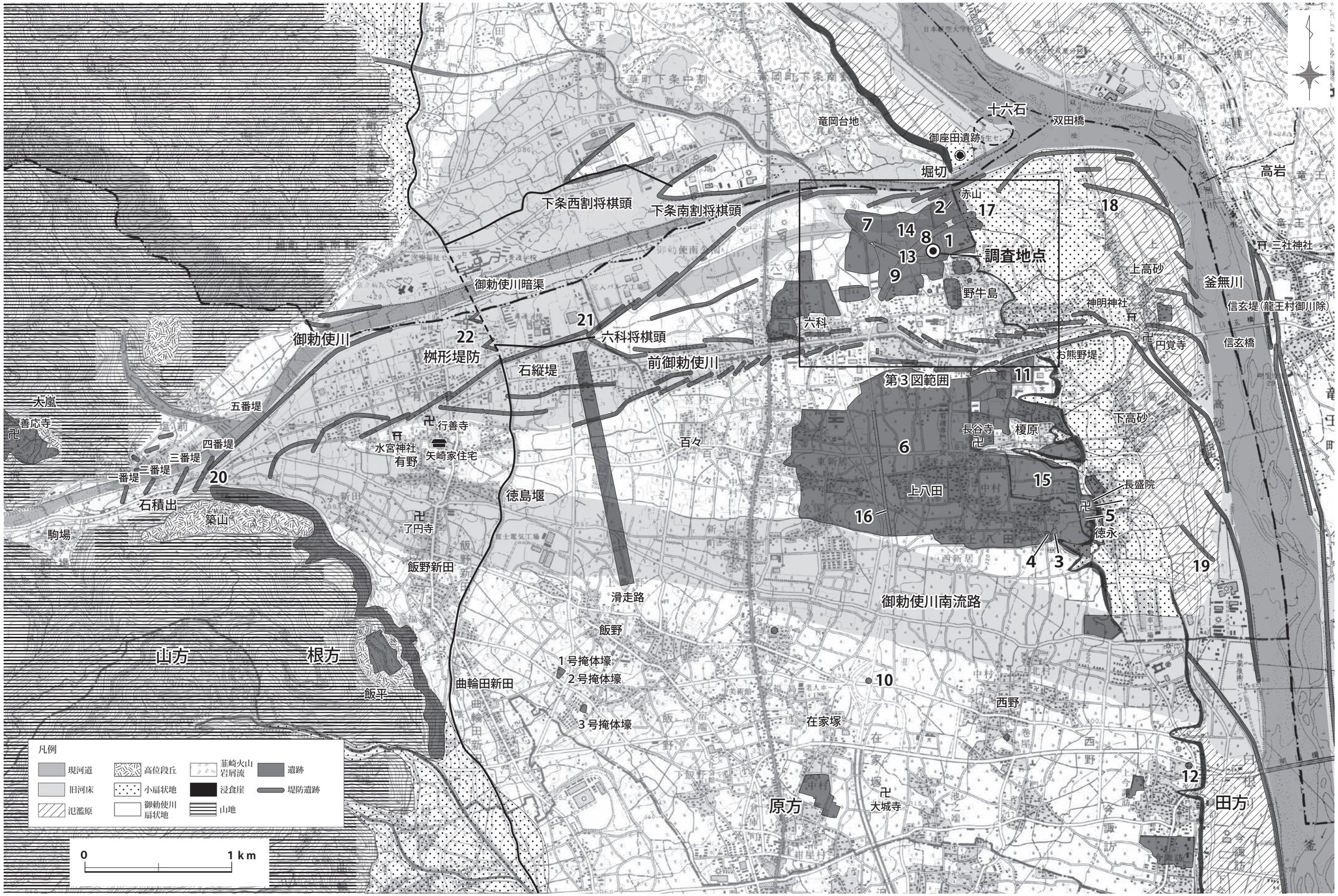
最も古い遺跡として、縄文時代中期の遺物が採取された赤山遺跡（２）があげられる。赤山遺跡は韮崎から続く竜岡台地の南端である赤山に位置している。縄文時代後期では、上八田堂前遺跡[註5]（３）や上八田下村遺跡[註6]（４）、徳永・御崎遺跡[註7]（５）、百々・上八田遺跡[註8]（６）が徳永、上八田両地区の浸食崖上に立地し[註9]、各遺跡からは、敷石住居や配石遺構が発見されており、扇状地扇端部へも集落が進出した形跡が認められる。縄文時代晩期～弥生時代中期では、扇状地扇端部から扇央部までの地域に遺跡が確認できる。野牛島地区の大塚遺跡[註10]（７）や石橋北屋敷遺跡[註11]（８）、立石下遺跡[註12]（９）では条痕文土器とともに弥生時代中期から後期の土器片が検出されている。また、扇央部に位置する横堀遺跡[註13]（10）でも縄文時代晩期～弥生時代前期の土器や石器が発見されている。

古墳時代前期では、本遺跡の西に隣接する野牛島・西ノ久保遺跡（14）や大塚遺跡で竪穴建物が検出され、榎原・天神遺跡[註14]（11）では前期の高坏を伴う畑状遺構が発見されている。後期では扇状地扇端部に立地する徳永・御崎遺跡第２地点[註15]（５）で竪穴建物が１軒発見されており、数が少ないながらも扇状地扇端部に後期集落が存在したことが明らかとなった。一方、御勅使川南流路の南、上今諏訪地区の御勅使川扇状地扇端部には後期古墳のおつき穴古墳（12）がある。現在は１基のみが確認されているだけだが、本来は群集墳であったと考えられる。

古代に入ると遺跡数は増加し、集落範囲も拡大する傾向となる。奈良時代８世紀初頭から平安時代９世紀中頃にかけて、本遺跡周辺の野牛島地区に遺跡が集中し、大塚遺跡や野牛島・西ノ久保遺跡、野牛島・大塚遺跡[註16]（13）、立石下遺跡、石橋北屋敷遺跡で集落跡が検出されている。扇状地扇端部に目を移すと、徳永地区の坂ノ上姥神遺跡[註17]（15）で８世紀代から９世紀の竪穴建物が発見されている。こうした遺跡の分布から、８世紀代では、野牛島地区および徳永地区の扇状地扇端部に集落が営まれた傾向がわかる。

９世紀から 10 世紀に入ると状況は変化を見せる。野牛島地区では、検出された竪穴建物が９世紀中頃から減少する一方で、前御勅使川を挟んだ南側の百々遺跡[註18]（16）では、９世紀初頭から集落が形成され、９～ 10 世紀を中心とした奈良・平安時代の竪穴建物が 250 軒以上発見されたほか、錘や石帯など公的機関の存在を示す遺物や、牧の存在を示唆する牛馬の獣骨などが 100 個体以上検出され、牧の管理にかかわる中心的な集落が存在したと考えられている。前御勅使川右岸に位置する榎原・天神遺跡でも 10 世紀代の竪穴建物が検出されている。また、百々遺跡の東側には平安時代創建の伝承をもち、平安時代中期の十一面観音立像を本尊とする真言宗の長谷寺が立地している。以上の状況から、９世紀に入ると前御勅使川右岸扇央部の百々地区から扇端部の上八田地区にわたる広い範囲にいくつかの集落が展開したと推測される。

中世で代表される遺跡は、本遺跡の北西に隣接する石橋北屋敷遺跡である。13 ～ 16 世紀の遺構が

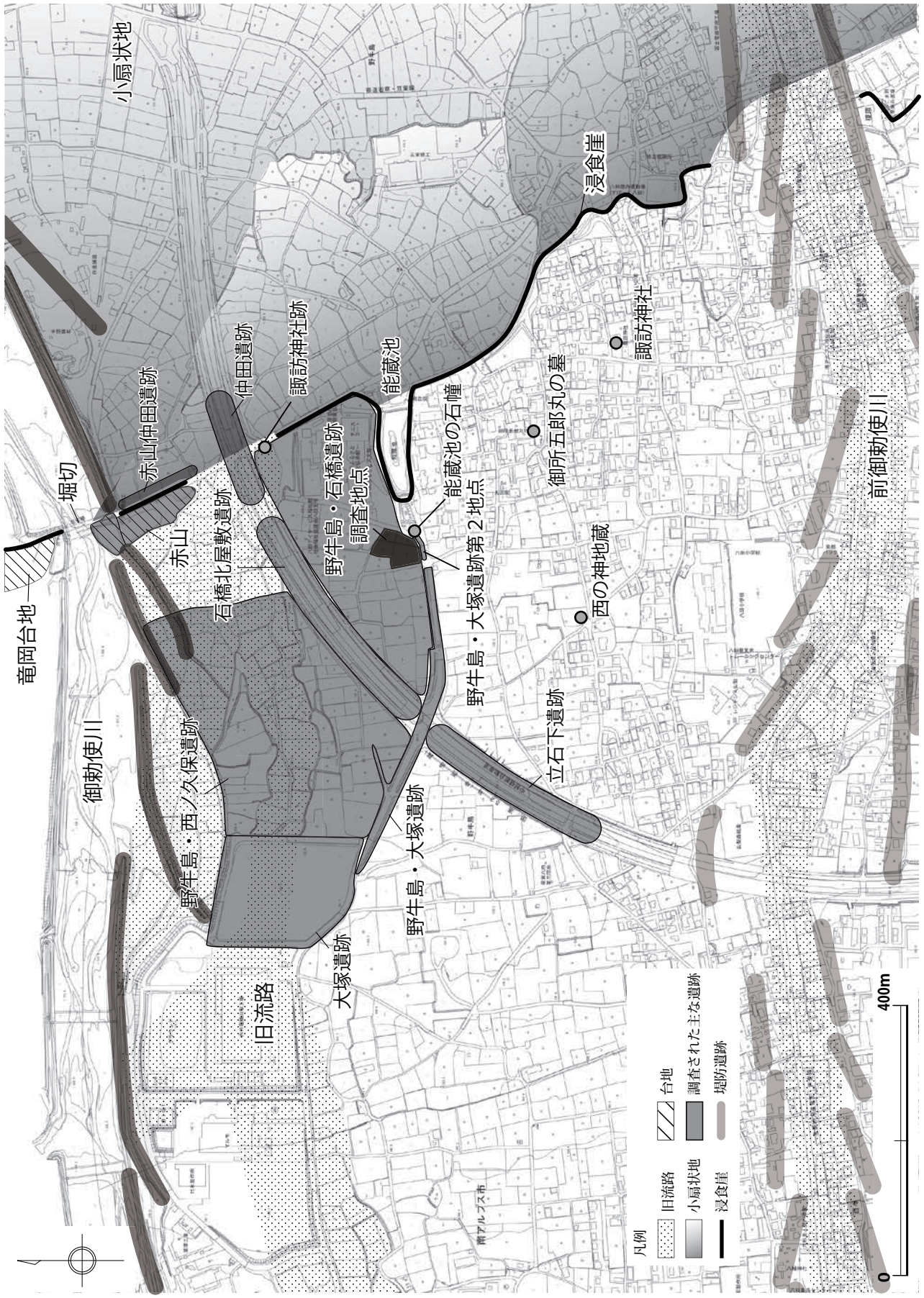


第２図　御勅使川扇状地地形分類図および遺跡分布図（1/25,000）

検出されており、竪穴建物や掘立柱建物址、両側に側溝をもつ幅約４ｍの道路跡やそれに直行する区画溝など、計画的に整備された土地利用の状況をうかがうことができる。同遺跡では 16 世紀後半の土坑墓も多数発見されており、この時期に墓地化したと推測されている。能蔵池の西端に位置する野牛島・大塚遺跡第２地点でも中世の区画溝、土坑墓が検出されており、古代と比べ集落の中心が「古屋敷」や「北屋敷」と呼ばれる能蔵池北西部へと移動している可能性が指摘できる。

一方石橋北屋敷遺跡と本遺跡の東側の御勅使川旧流路上に位置する仲田遺跡[註19]（17）では、中世から近世までの水田床土層が砂礫層と互層で何層も発見されており、戦国時代から現代まで継続的に水田耕作が営まれていたことが明らかとなっている。

こうした集落遺跡や生産遺跡のほかに、御勅使川、前御勅使川、釜無川沿いには堤防をはじめとする治水施設が築かれてきた。その中で、釜無川沿いでは上高砂地区に位置する壱番下堤跡[註20]（18）で近世の堤防跡が発見され、さらに南に位置する徳永地区と下高砂地区では天保８年（1837）に築堤された百間堤[註21]（19）と呼ばれる堤防の調査が行われている。また武田信玄築堤の伝承をもつ石積出四番堤[註22]（20）や六科将棋頭[註23]（21）、桝形堤防[註24]（22）の調査では、根固めに「梯子土台」や「木工沈床」を用いた遺構が検出され、現在の遺構が明治大正期に改修されたものであることが明らかにされている。



第３図　野牛島・石橋遺跡周辺の地形分類図および主要遺跡分布図（1/8,000）

註

（註１）畑　大介　1997 「御勅使川の流路変更に関する一視点」『帝京大学文化財研究所報』第 31 号

（註２）保坂康夫　1999 「御勅使川扇状地の古地形と遺跡立地―中部横断道の試掘調査の成果から―」『研究紀要』15　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

2002 「御勅使川の流路変遷にかかわる最近の考古学的知見」『甲斐路』第 100 号

（註３）川﨑　剛　1994 「釜無川の流路変遷について」『武田氏研究』13 号　武田氏研究会

（註４）南アルプス市教育委員会　2009 『野牛島・西ノ久保遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区』 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書　第 19 集

同　2009 『野牛島・西ノ久保遺跡Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ区』 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書　第 20 集

（註５）白根町教育委員会　1985 『白根町の文化財案内』

（註６）白根町埋蔵文化財包蔵地カード

（註７）八田村教育委員会　2002 『徳永・御崎遺跡』 八田村文化財調査報告書　第４集

（註８）南アルプス市教育委員会　2005 『平成 15・16 年度埋蔵文化財試掘調査報告書』 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書　第 10 集

（註９）上八田堂前遺跡、上八田下村遺跡、百々遺跡は旧白根町時代に発掘調査が行われた遺跡である。平成 15 年６町村合併後、南アルプス市で実施した遺跡分布調査の結果、３遺跡を含めて周辺地域を「百々・上八田遺跡」としたが、本節では調査地点を示すために旧遺跡名で表記する。

（註 10）山梨県教育委員会他　1997 『大塚遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 137 集

（註 11）山梨県教育委員会他　2000 『石橋北屋敷遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 178 集

（註 12）山梨県教育委員会他　2001 『立石下遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 189 集

（註 13）山梨県教育委員会他　2001 『横堀遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 184 集

（註 14）八田村教育委員会他　2001 『榎原・天神遺跡』 八田村文化財調査報告書　第３集

（註 15）同註８

（註 16）八田村教育委員会　2000 『野牛島・大塚遺跡』 八田村文化財調査報告書　第２集　八田村教育委員会

山梨県教育委員会他　2003 『野牛島・大塚遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 203 集

（註 17）南アルプス市教育委員会　2015 『坂ノ上姥神遺跡』南アルプス市埋蔵文化財調査報告書　第 40 集

（註 18）山梨県教育委員会他　2002 『百々遺跡１』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 201 集

同　2004 『百々遺跡 2･4』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 212 集

同　2004 『百々遺跡 3･5』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 213 集

同　2005 『百々遺跡６』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 231 集

（註 19）山梨県教育委員会他　2001 『仲田遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 189 集

（註 20）山梨県教育委員会他　2001 『壱番下堤跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 190 集

（註 21）山梨県教育委員会他　2005 『釜無川堤防跡群（堤防遺跡 No. ２３）』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 277 集

（註 22）南アルプス市教育委員会　2008 『石積出四番堤』 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書　第 16 集

（註 23）宮沢公雄他　1998 『将棋頭遺跡・須沢城址』 白根町教育委員会

南アルプス市教育委員会　2009 『平成 19 年度埋蔵文化財試掘調査報告書・御勅使川堤防址群』 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書　第 22 集

（註 24）南アルプス市教育委員会　2010 『桝形堤防』 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書　第 25 集

第Ⅲ章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

試掘調査は、平成 25 年７月 29 日に着手し、道路予定地を中心に任意寸法のトレンチを６箇所（第１～６トレンチ）設定して調査を行い、地表下約 75 ～ 85cm で竪穴建物、溝状遺構、土坑を検出し、８月１日に埋め戻しを行って調査を完了した。試掘調査結果については「南アルプス市埋蔵文化財試掘調査報告書第 43 集　平成 25 年度埋蔵文化財試掘調査報告書」に掲載した。

調査成果を基に遺跡の保存協議を行った結果、宅地部分は盛土保存することとし、遺構が検出された道路部分（約 216 ㎡）について本調査を実施することとした。

発掘調査は、宅地造成工事の工程の関係から工事とほぼ平行して実施することになり、平成 25 年 10 月 15 日に準備、同月 16 日に調査に着手した。

第２節　層序

調査区は御勅使川扇状地先端部に立地し、周辺の地形は西から東へとゆるやかに傾斜している。調査区全体の堆積状況はほぼ以下の７層である。

土層説明

第Ⅰ層　灰褐色土　耕作土。

第Ⅱ層　褐灰色土　旧水田床土。酸化鉄濃集層。橙色粒子を多量に含む。

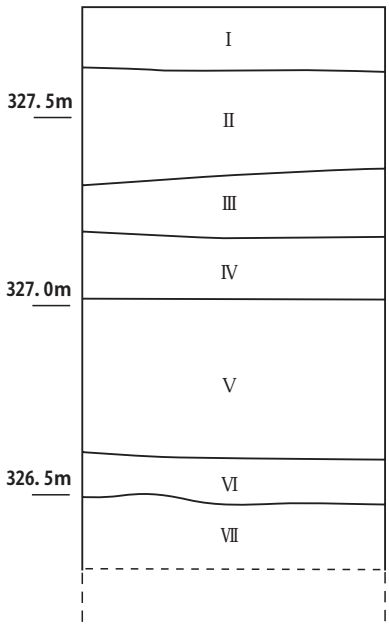
第Ⅲ層　褐灰色土　旧水田床土。酸化鉄濃集層。

第Ⅳ層　褐色土　しまりあり。粘性やや欠。砂を含む。

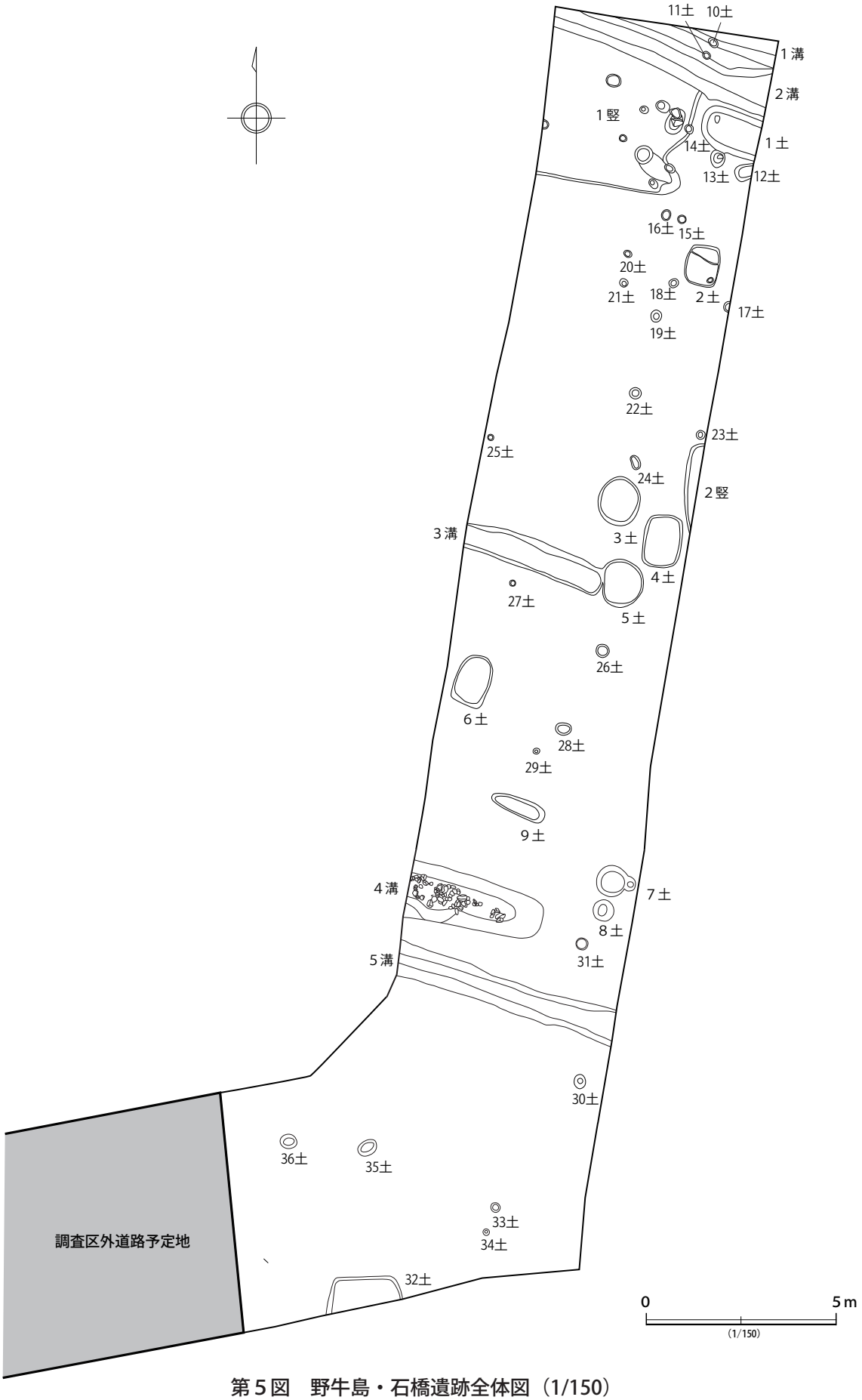
第Ⅴ層　明褐色土　しまりあり。粘性ややあり。シルト。

第Ⅵ層　明褐色土　しまりあり。粘性あり。シルト。径１cm 以下の石を含む。

第Ⅶ層　暗褐色土　砂礫層。径 10cm 以下の石を多量に含む。



第４図　基本層序柱状図（1/20）



第５図　野牛島・石橋遺跡全体図（1/150）

第３節　遺構と遺物

１．竪穴建物

１号竪穴建物（第５・６・11 図、第２・３表、写真図版２・３・４・15）

遺存　遺存状態は悪く、確認面から床面まで深さ約 10cm を数える。

形状　西・北側部分が調査区外に延びるため形状は不明であるが、隅丸方形のプランを呈すると推測される。

重複　２号溝状遺構に切られている。

床面　地山の明褐色粘土層を利用している。顕著な硬化面は検出されなかった。竪穴建物北側に 34 × 30cm の焼土の堆積が認められた。

壁溝　検出されなかった。

カマド　建物南東隅の東壁に造られている。天井部および袖部は残存していないが、袖石を埋め込んだと考えられるピット３とピット４が検出された。

ピット　竈の北側には 68 × 42cm、深さ約 10cm を測るピット１が設けれられ、覆土中から２個の自然石が出土した。

遺物　１と２の土師器小皿片が２点、３の棒状鉄製品１点が床面上より出土した。

時期　出土遺物が少ないため時期の特定は難しいが、１の小皿とコーナー竈から判断して 11 世紀から 12 世紀前葉と推測される。

２号竪穴建物（第５・７図、写真図版６・10）

遺存　依存状態は比較的良好で、確認面から床面まで深さ約 30cm を数える。

形状　東側の大部分が調査区外に延びるため形状は不明である。

重複　なし。

床面　地山の明褐色粘土層を利用している。

壁溝・カマド　検出されなかった。

遺物　なし。

時期　出土遺物がなく、大部分が未調査のため時期は不明である。

２．溝状遺構

１号溝状遺構（第５・８図、写真図版２・４）

形状・規模　形状は調査区外へ続くため不明、確認面から底面まで深さ約 29cm を数える。２号溝状遺構とほぼ平行に東西に走り西から東へゆるやかに傾斜している。断面はすり鉢型を呈し、底面がやや平坦となる。覆土は灰褐色土が主体である。

重複　２号溝状遺構とほぼ同じ覆土であり、両者に切り合い関係は認められなかった。

遺物　なし。

時期　出土遺物がないため判断できないが、覆土が２号溝状遺構と同じ灰褐色土であることから、中世としておきたい。

２号溝状遺構（第５・８・11 図、第２表、写真図版２・４・15）

形状・規模　幅約 80 ～ 120cm、確認面から底面まで深さ約 39cm を数える。１号溝状遺構とほぼ平行に東西に走り、西から東へゆるやかに傾斜している。断面は逆台形を呈し、底面がやや

平坦となる。覆土は灰褐色土が主体である。

重複　1号竪穴建物を切って造られている。

遺物　1は土師質の皿片で、覆土中から1点のみ出土した。

時期　1の皿から15世紀と推測される。

3号溝状遺構（第5・8図、写真図版6）

形状・規模　幅約60～75cm、確認面から底面まで深さ約18cmを数える。東西に走り、西から東へゆるやかに傾斜している。断面は逆台形を呈し、底面がやや平坦となる。

重複　5号土坑に切られている。

遺物　遺物は鍋片1点が出土した。。

時期　時期は不明だが、他の中世の溝状遺構と同じ灰褐色土が覆土の主体である。

4号溝状遺構（第5・8・11図、第2表、写真図版11・12・15）

形状・規模　幅約110～145cm、確認面から底面まで深さ約33cmを数える。5号溝状遺構とほぼ平行に東西に走り、西から東へゆるやかに傾斜している。断面はすり鉢型を呈し、底面がやや平坦となる。覆土は灰褐色土が主体である。溝の底面から径8～25cmの石がまとまって検出された。

重複　なし。

遺物　出土数は少なく、すべて小片である。1、2は土師質の皿、3は土師質の小皿である。小片のため図化していないが、擂鉢片も出土している。

時期　1～3の遺物から15世紀と推測される。

5号溝状遺構（第5・8図、写真図版11）

形状・規模　幅約70～90cm、確認面から底面まで深さ約30cmを数える。4号溝状遺構とほぼ平行に東西に走り、西から東へゆるやかに傾斜している。断面は逆台形を呈し、底面がやや平坦となる。覆土は灰褐色土が主体である。

重複　なし。

遺物　覆土中から黒曜石片が1点出土した。

時期　時期は不明だが、他の中世の溝状遺構と同じ灰褐色土が覆土の主体である。

3．土坑（第5・9・10・11図、第1～4表、写真図版2・4～10・12・15）

1号土坑（第5・10図、第1表、写真図版2・5）

形状･規模　東側部分が調査区外に延びるため、その形状は不明であり、溝状遺構の可能性もある。現状では楕円形を呈すると推測される。確認面から底面まで深さ約26.9cmを測る。

遺物　なし。

時期　時期は不明だが、他の中世の土坑と同じ灰褐色土が覆土の主体である。

2号土坑（第5・10・11図、第1・3表、写真図版2・5・15）

形状・規模　隅丸方形を呈する。確認面から底面まで深さ約17cmを測る。

遺物　覆土中から棒状鉄製品1点が出土した。

時期　時期は不明だが、他の中世の土坑と同じ灰褐色土が覆土の主体である。

3号土坑（第5・10図、第1表、写真図版6・7）

形状・規模　楕円形を呈する。確認面から底面まで深さ約65cmを測る。底面に径約50cmの範囲で炭化物層が検出された。土坑内で何かを焼いた痕跡と考えられる。

時期　時期は不明だが、他の中世の土坑と同じ灰褐色土が覆土の主体である。

４号土坑（第５・10 図、第１表、写真図版６・７）

形状・規模　隅丸方形を呈する。確認面から底面まで深さ約 34cm を測る。

遺物　覆土中から鍋の小片が出土した。

時期　時期は不明だが、他の中世の土坑と同じ灰褐色土が覆土の主体である。

５号土坑（第５・９・11 図、第１・４表、写真図版８・15）

形状・規模　隅丸方形を呈する。確認面から底面まで深さ約 22cm を測る。

重複　３号溝状遺構を切っている。

人骨・遺物　北頭位で西を向いた屈葬の人骨を１個体検出した。被葬者の腰付近には長径 14cm の石が置かれていた。また、左肘付近から６枚の銅銭が紐で通したように縦に貼り付いて出土した。１～６すべて寛永通寶である。銅銭の下には薄い植物遺体が認められた。銅銭を納めたものの一部とも考えられるため樹種同定を行ったところ、草本までの特定にとどまった（第Ⅳ章参照）。

時期　副葬された銅銭は寛永 13 年（1636）から万治２年（1659）まで鋳造された古寛永通寶であり、そこからから判断すれば、17 世紀と推測される。

６号土坑（第５・９・11 図、第１・４表、写真図版９・15）

形状・規模　隅丸方形を呈する。確認面から底面まで深さ約 30cm を測る。

人骨・遺物　北頭位で西を向いた屈葬の人骨を１個体検出した。被葬者の顔前に３枚の銅銭が副葬されていた。１と２は重なっており、１は永楽通寶、２は判読不明、３は朝鮮通寶である。銅銭の下には５号土坑と同様に植物遺体が認められた。銅銭を納めたものと考えられるため樹種同定を行ったところヒノキ科と特定され、銅銭を入れた木箱である可能性が推測されている（第Ⅳ章参照）。

時期　永楽通寶（1408 ～）や朝鮮通寶（1423 ～）から判断すれば、15 ～ 16 世紀と推測される。時期は不明だが、他の中世の土坑と同じ灰褐色土が覆土の主体である。

７号土坑（第５・10 図、第１表、写真図版 10）

形状・規模　不整円形を呈する。確認面から底面まで深さ約 28cm を測る。

遺物　なし。

時期　時期は不明だが、他の中世の土坑と同じ灰褐色土が覆土の主体である。

８号土坑（第５・10・11 図、第１・２表、写真図版 10・15）

形状・規模　円形を呈する。確認面から底面まで深さ約 17cm を測る。

遺物　１は内耳鍋の破片である。

時期　１の内耳鍋片から 15 世紀と推測される。

９号土坑（第５・10 図、第１表、写真図版 10）

形状・規模　楕円形を呈する。確認面から底面まで深さ約 12cm を測る。

遺物　土師器甕の小片などが出土した。

時期　甕片から判断すれば、奈良・平安時代と推測される。

32 号土坑（第５・10 図、第１表、写真図版 12）

形状・規模　南側部分が調査区外に延びるため正確な形状は不明であるが、現状では隅丸方形を呈すると推測される。確認面から底面まで深さ約 68cm を測る。

遺物　なし

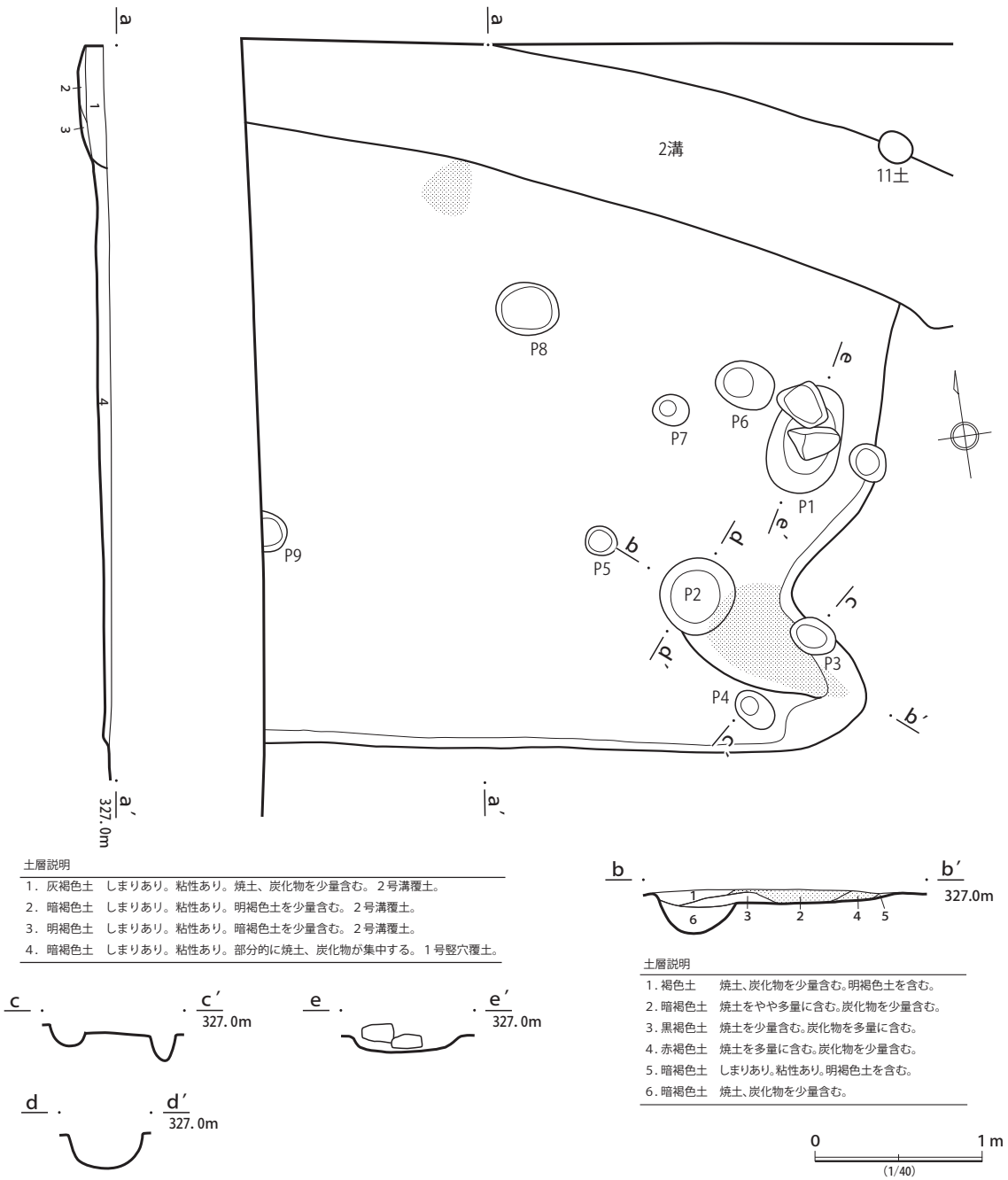
時期　時期は不明だが、古代の遺構と同じ暗褐色土が覆土の主体である。

その他の土坑については土坑計測表を参照していただきたい。

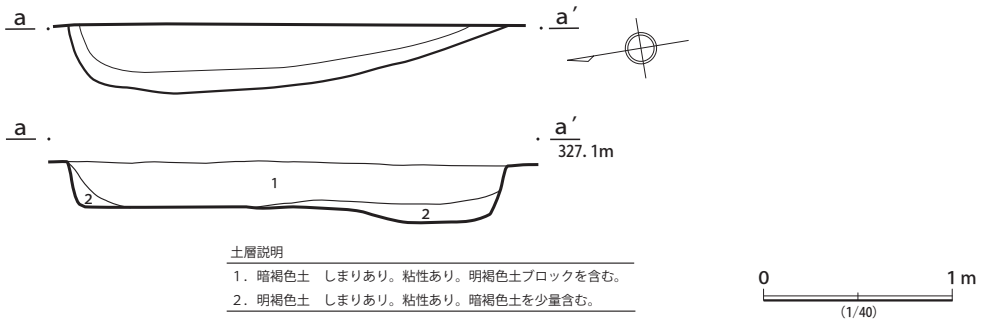
第１表　土坑計測表（第５・９・10 図）

土坑番号	形	径（cm）	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	備考
1	（楕円形）		（150）	108	26.9	
2	隅丸方形		102	85	17.0	棒状鉄製品出土
3	楕円形		124	100	65.0	
4	隅丸方形		134	97	34.0	
5	隅丸方形		120	96	22.0	
6	隅丸方形		128	85	30.0	
7	不整円形		100	77	28.0	
8	円形		51	48	17.0	内耳鍋出土
9	楕円形		143	41	12.0	土師器坏・甕出土
10	楕円形		28	20	18.6	土師質の皿、擂鉢出土
11	円形	21			22.7	
12	楕円形		（45）	40	18.0	
13	楕円形		44	36	28.0	
14	楕円形		25	18	22.0	
15	円形	20			23.0	
16	楕円形		27	22	24.0	
17	（円形）	（26）			（12.0）	
18	楕円形		25	20	11.0	陶器出土
19	円形	29			18.0	
20	楕円形		22	17	6.0	
21	円形	20			8.0	
22	円形	29			5.0	
23	円形	21			15.0	
24	楕円形		36	20	13	
25	円形	15			12.0	
26	円形	31			17.0	
27	円形	13			13.0	
28	楕円形		40	30	6.0	
29	円形	16			8.0	
30	楕円形		38	30	5.9	
31	楕円形		30	26	17.0	
32	（隅丸方形）		（195）		（68.0）	
33	円形	22			8.0	
34	円形	29			10.0	
35	楕円形		48	35	13.0	
36	楕円形		41	34	22.0	

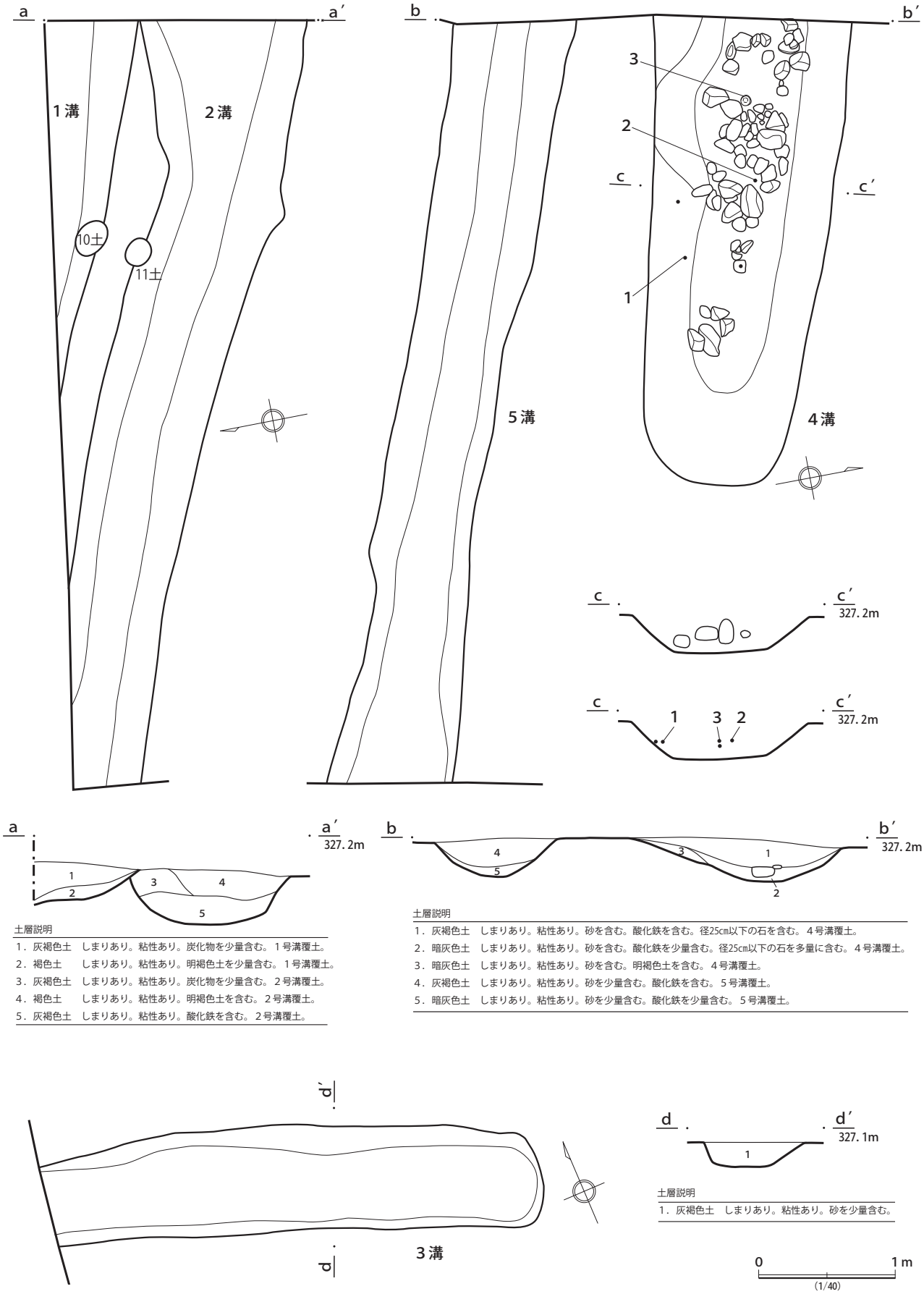
※・・・形の（　）は推定形、径・長軸・短軸の（　）は現存値



第６図　１号竪穴建物平・断面・エレベーション図（1/40）



第７図　２号竪穴建物平・断面図（1/40）



土層説明

1．灰褐色土　しまりあり。粘性あり。炭化物を少量含む。１号溝覆土。
2．褐色土　しまりあり。粘性あり。明褐色土を少量含む。１号溝覆土。
3．灰褐色土　しまりあり。粘性あり。炭化物を少量含む。２号溝覆土。
4．褐色土　しまりあり。粘性あり。明褐色土を含む。２号溝覆土。
5．灰褐色土　しまりあり。粘性あり。酸化鉄を含む。２号溝覆土。

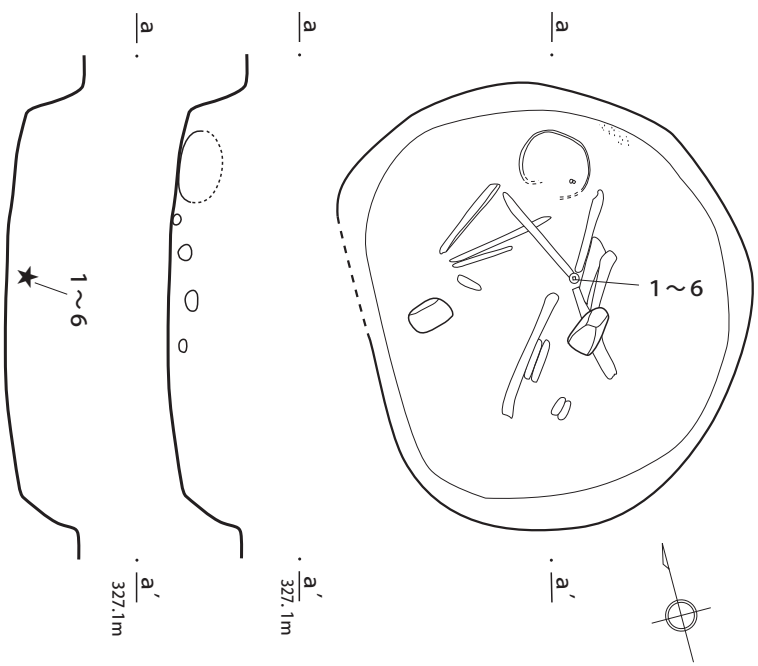
土層説明

1．灰褐色土　しまりあり。粘性あり。砂を含む。酸化鉄を含む。径25㎝以下の石を含む。４号溝覆土。
2．暗灰色土　しまりあり。粘性あり。砂を含む。酸化鉄を少量含む。径25㎝以下の石を多量に含む。４号溝覆土。
3．暗灰色土　しまりあり。粘性あり。砂を含む。明褐色土を含む。４号溝覆土。
4．灰褐色土　しまりあり。粘性あり。砂を少量含む。酸化鉄を含む。５号溝覆土。
5．暗灰色土　しまりあり。粘性あり。砂を少量含む。酸化鉄を少量含む。５号溝覆土。

土層説明

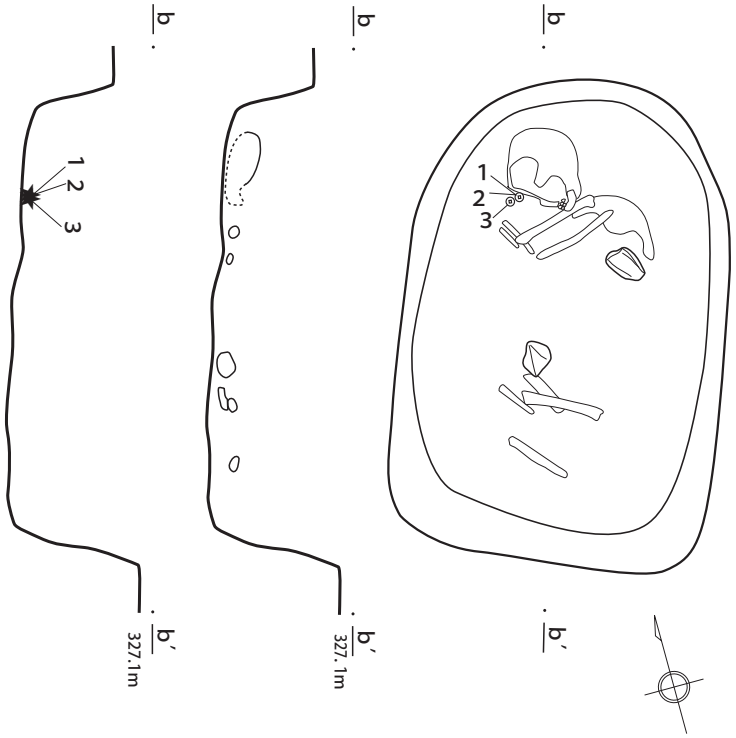
1．灰褐色土　しまりあり。粘性あり。砂を少量含む。

第８図　１号・２号・３号溝状遺構平・断面・エレベーション図および遺物分布図（1/40）



銅銭出土状況

5号土坑

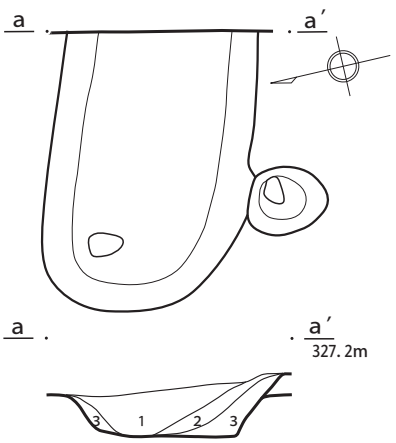


銅銭出土状況

6号土坑

0　50cm
(1/20)

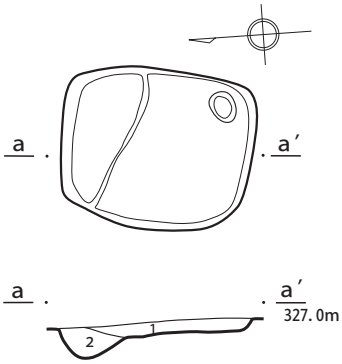
第９図　土坑平面・エレベーション図および遺物分布図（1/20）



土層説明

1．灰褐色土　しまりあり。粘性あり。酸化鉄を少量含む。
2．灰褐色土　しまりあり。粘性あり。明褐色土を少量含む。
3．灰褐色土　しまりあり。粘性あり。明褐色土を含む。

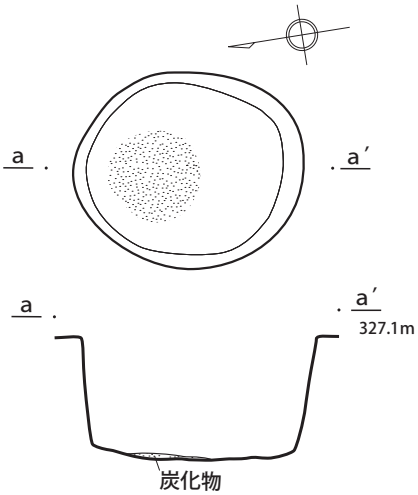
1号土坑



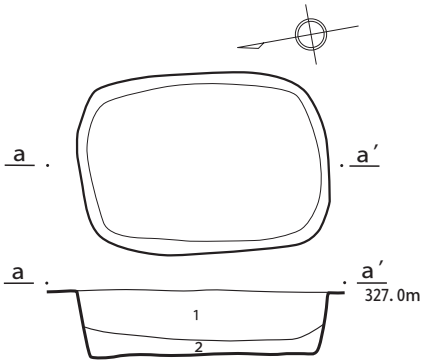
土層説明

1．灰褐色土　しまりあり。粘性あり。赤褐色粒子を含む。
2．暗褐色土　しまりあり。粘性あり。灰褐色土を少量含む。

2号土坑



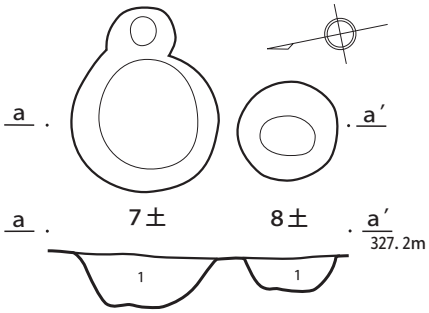
3号土坑



土層説明

1．灰褐色土　しまりあり。粘性あり。焼土、炭化物を少量含む。
2．暗褐色土　しまりあり。粘性ややあり。砂、径５㎝以下の石を少量含む。

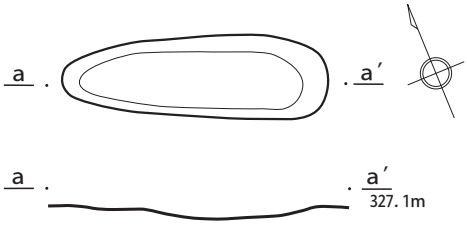
4号土坑



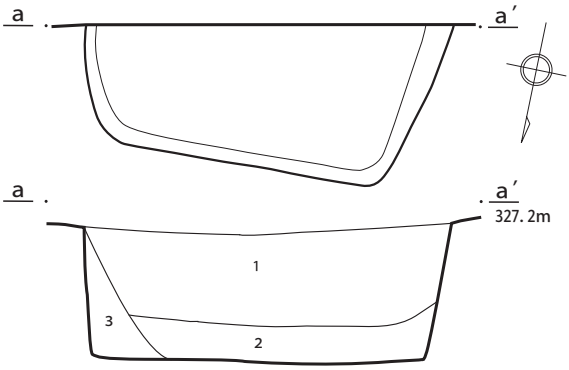
土層説明

1．灰褐色土　しまりあり。粘性ややあり。炭化物を少量含む。
径15㎝以下の石を含む。

7・8号土坑



9号土坑



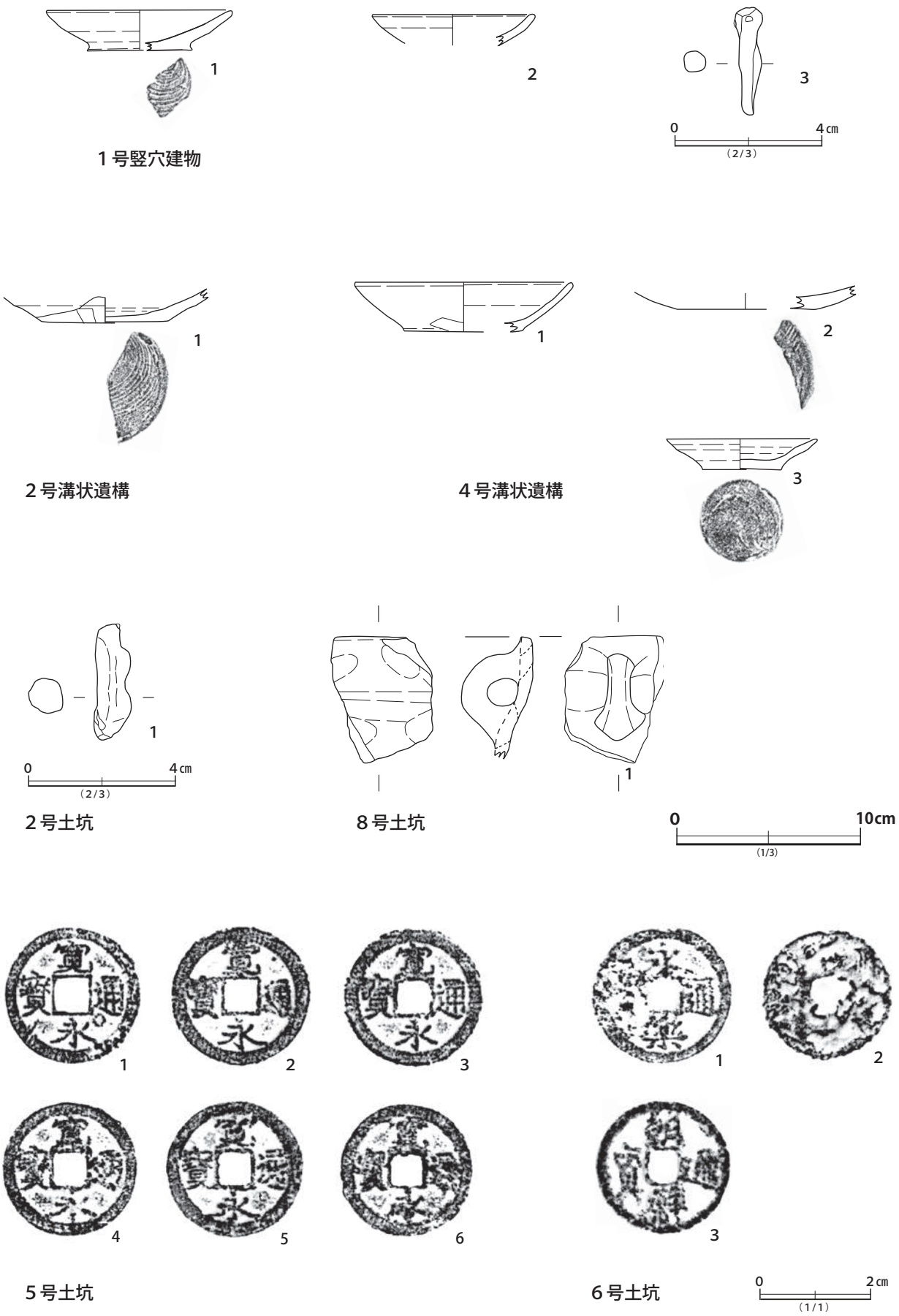
土層説明

1．暗褐色土　しまりあり。粘性ややあり。径２㎝以下の石を含む。
2．暗褐色土　しまりあり。粘性ややあり。径５㎝以下の石を多量に含む。
3．暗褐色土　しまりあり。粘性ややあり。シルト。径２㎝以下の石を少量含む。

32号土坑

0　1m
(1/40)

第10図　土坑平・断面・エレベーション図（1/40）



1号竪穴建物

2号溝状遺構

4号溝状遺構

2号土坑

8号土坑

5号土坑

6号土坑

第11図　出土遺物（1/1・2/3・1/3）

第２表　土器観察表（第 11 図）

遺構名	番号	種別	器種	法量 (cm)			残 存 率	製作技法			胎土	含有物	色調　外 / 内	焼成	注記番号	備考
				口径	底径	器高	(%)	内面	外面	底部						
１号竪穴	1	土師器	小皿	10.1	5.7	2.2	25	ロクロナデ	ロクロナデ	底部回転糸切	やや密	金雲母	黒褐 / 暗褐	やや良	YI.1 タテ -1	反転実測
１号竪穴	2	土師器	小皿	8.8	—	—	20	ロクロナデ	ロクロナデ	—	やや粗	金雲母	黒褐	やや良	YI.1 タテ -2	反転実測
２号溝	1	土師質	皿	—	6.8	—	40	ロクロナデ	ヘラケズリ	底部回転糸切	やや密	白色粒子、長石	にぶい褐 / 黒褐	やや良	YI.2 ミゾ -1	反転実測
４号溝	1	土師質	皿	（11.8）	6.4	2.7	25	ロクロナデ	ヘラケズリ	—	密	白色粒子、金雲母	にぶい橙 / 黒褐	やや良	YI.4 ミゾ -1	反転実測
４号溝	2	土師質	皿	—	7.4	—	25	ロクロナデ	ロクロナデ	底部回転糸切？	密	白色粒子、金雲母	にぶい橙	やや良	YI.4 ミゾ -2	磨耗顕著、反転実測
４号溝	3	土師質	小皿	8.2	4.2	1.7	90	ロクロナデ	ロクロナデ	底部回転糸切	やや密	白色粒子、長石	にぶい赤褐	やや良	YI.4 ミゾ -3	内面一部に煤付着
８号土坑	1	土師質	内耳鍋	—	—	—	破片	ナデ	口縁部ヨコナデ、指頭痕	—	やや密	白色粒子、金雲母、黒雲母	にぶい黄橙	やや良	YI.8 土	

第３表　鉄製品観察表（第 11 図）

遺跡名	番号	種類	法量 (cm)			重量 (g)	取上げ№	備　考
			長さ	幅	厚さ			
１号竪穴	3	棒状鉄製品	2.9	0.75	0.6	2.0	鉄№ 1	
２号土坑	1	棒状鉄製品	3.2	1.0	1.0	4.0	鉄№ 1	

第４表　古銭観察表（第 11 図）

遺跡名	番号	銭種	法量 (mm)		重量 (g)	取上げ№	備　考
			長さ	厚さ			
５号土坑	1	寛永通寶	24	1	4	No. 1	１～６が重なって出土
５号土坑	2	寛永通寶	24	1	3	No. 2	１～６が重なって出土
５号土坑	3	寛永通寶	24	1	4	No. 3	１～６が重なって出土
５号土坑	4	寛永通寶	24	1	3	No. 4	１～６が重なって出土
５号土坑	5	寛永通寶	24	1	5	No. 5	１～６が重なって出土
５号土坑	6	寛永通寶	23.5	1	4	No. 6	１～６が重なって出土
６号土坑	1	永楽通寶	24.5	1	4	No. 1	１と２が重なって出土
６号土坑	2	（判読不能）	22.5	1	2	No. 2	１と２が重なって出土
６号土坑	3	朝鮮通寶	24	1	3	No. 3	

第Ⅳ章　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

野牛島・石橋遺跡（山梨県南アルプス市野牛島地内）は、御勅使川が形成した扇状地の北側、扇央から扇端付近に立地する。本遺跡が所在する野牛島地区は、現在の御勅使川と前御勅使川の旧流路との間の微高地に相当し、これまでの発掘調査により古墳時代より古代、中世の各時期の集落の存在が明らかとされている。今回の発掘調査が実施された野牛島・石橋遺跡では、古代の集落および中世の土坑墓が確認されている。

本報告では、上記した土坑墓から出土した銅銭に伴うと考えられる植物遺体の鑑定、土坑墓より出土した人骨の年齢や性別等に関わる資料の作成を目的として、自然科学分析を実施した。

第 1 節　樹種同定および組織観察

1. 試料

試料は、中近世の土坑墓 2 基（5、6 号土坑）より採取された土壌 2 点（5 号土坑 六道銭、6 号土坑銭）である。試料は、いずれも土坑墓の埋葬品とみられる銅銭とともに取上げられた塊状を呈する土壌であり、古銭の他に繊維状あるいは板状を呈する植物遺体が認められる。以下に、今回の分析に供された試料および採取した試料の概要を記す。

（1）5 号土坑試料（5 号土坑 六道銭）

5 号土坑試料は、長さ約 6.5cm、幅約 4.7cm、高さ約 3.0cm を測る土塊状を呈し、表面には 6 枚の古銭が観察される（図版 1-1a）。この土塊試料の古銭下位には複数の植物遺体が観察されることから、古銭を取外した後に、観察される植物遺体の分布状況を記録しながら、後述する分析試料の採取を行った。これらの工程の結果、植物遺体は 2 面にわたり確認され、試料として 1 面より 2 点（植物遺体 a,b）、2 面より 2 点（植物遺体 c,d）の計 4 点を採取している（図版 1-1b,1c）。

（2）6 号土坑試料（6 号土坑 銭）

6 号土坑試料は、長さ約 5.2cm、幅約 4.0cm、厚さ約 2.4cm を測る土塊状を呈し、表面には 3 枚の古銭が観察される（図版 1-2a）。本試料も 5 号土坑試料と同様の作業を行った結果、植物遺体が 2 面確認された。試料は、古銭裏側に付着した植物遺体（植物遺体 a-1）と古銭下位に認められた植物遺体（植物遺体 a-2）の 2 点と、植物遺体 a-1,2 の下位に確認された板目板状を呈する木片（植物遺体 b）の計 3 点を採取している（図版 1-2b,2c）。

本分析では、（1）・（2）に記した木片を含む植物遺体 7 試料について、組織観察および樹種同定を実施した。

2. 分析方法

剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同

表１　樹種同定結果

遺構	出土位置＊	試料名	状態	種類（分類群）
5号土坑	1面	a	破片	草本
	1面	b	破片	草本
	2面	c	破片	草本
	2面	d	破片	草本
6号土坑	1面	a-1	破片	草本
	1面	a-2	破片	樹皮
	2面	b	（板目）板状	ヒノキ科

＊詳細は図版1を参照

定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

3. 結果

同定結果を表 1 に示す。5 号土坑の植物遺体 a ～ d は、全て草本類の植物体（茎）、6 号土坑の植物遺体は針葉樹のヒノキ科、樹皮、草本類に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ヒノキ科（Cupressaceae）

試料は小片で保存状態が悪く、板目面の切片が採取できなかった。軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められるが、目立たない。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は観察できない。放射組織は、木口と柾目で観察した範囲では、単列、1-10 細胞高。

・樹皮

試料は、師部細胞のみで構成され木部細胞が観察できないことから、樹皮と判断される。また、木部細胞が観察できないため種類は不明である。なお、師部細胞が薄く、中空の筒状となるように見えることや木部細胞が観察できない状況から、根の先端に近い部分の可能性がある。

・草本類

5 号土坑の植物遺体（a ～ d）は、いずれも保存状態が悪く、横断面の切片を採取するとバラバラになる。維管束の一部と考えられる円形の繊維の集合体が認められる。試料によっては、円形の集合体が水平方向に並ぶ様子も見られる。観察した範囲で放射組織は認められない。これらの特徴から、不斉中心柱の組織構造を持つ草本類と考えられるが、種類の特定には至らない。

6 号土坑の植物遺体（a-1）は、柔らかく、木口面の切片が採取できないため、縦断面を中心に観察した。観察した範囲では、軸方向組織のみで構成され、放射組織が認められない。この特徴から草本類と考えられる。試料はやや木質化していることから根に由来する可能性がある。

4. 考察

5 号土坑および 6 号土坑の銅銭の下位に認められた植物遺体は、5 号土坑試料がすべて草本類、6 号土坑試料には針葉樹のヒノキ科のほか、樹皮、草本類が確認された。

5 号土坑の植物遺体は、組織の特徴から全て同じ種類の草本類と推定される。試料採取時の観察では、

銅銭の直下に植物遺体が重複する状況が確認できていることから、銅銭を納めた植物質資料の痕跡あるいは土坑底面の敷物等に由来する可能性がある。

一方の６号土坑の植物遺体には、ヒノキ科、樹皮、草本類が確認された。これらのうち種類が明らかとなったヒノキ科は、ヒノキ、サワラ、アスナロ等の有用材が含まれる。ヒノキ科の木材は木理が通直で割裂性や耐水性が高いことから、板状加工が容易であり板状の容器（曲物、箱）等の利用例も多い。さらに、伊東・山田（2012）によれば、埋葬施設の木棺等にもヒノキ科の木材（ヒノキ、サワラ、ヒノキ属、アスナロ等を含む）を利用する事例が確認でき、山梨県内では二本柳遺跡（旧若草町）の戦国時代～江戸時代初期とされる組合せ木棺にヒノキ属、北河原遺跡（旧玉穂町）の中・近世とされる墓壙の木枠にヒノキやヒノキ科が確認されている。今回の試料は、銅銭に伴って出土していることから、銅銭を納めた容器あるいは木棺等の部材等に由来する可能性がある。なお、草本類とした植物遺体 a-1 や樹皮の可能性がある植物遺体 a-2 は、いずれも根に由来する可能性が推定された。これら植物遺体については上記したヒノキ科の木片とは由来が異なる可能性があるため、銅銭の周囲および土坑墓内の調査状況を含めた評価が望まれる。

第２節　出土人骨

1. 試料

試料は、中近世の土坑墓（5、6 号土坑）より出土した人骨の頭蓋（歯牙を含む）である。いずれも遺構内より土塊として取上げられており、頭蓋内部や表面には泥（シルト～粘土）が充填および付着する。

2. 分析方法

試料確認の結果、頭蓋は極めて脆弱であり、泥を除去すると形質を保てないと判断された。そのため、泥等の除去は必要最小限にとどめ、土塊の状態で観察および同定を行っている。また、調査担当者により頭蓋から抽出された歯牙については、藤田（1949）に基づき、デジタルノギスを用いて計測する。なお、年齢に関しては、幼児が 1 ～ 5 歳程度、小児が 6 ～ 15 歳程度、成人が 16 歳程度以上、成年が 16 ～ 20 歳程度、壮年が 21 ～ 39 歳程度、熟年が 40 ～ 59 歳程度、老年が 60 歳以上を表す。

3. 結果および考察

同定結果を表 2 に示す。以下に、遺構別に所見を記す。

（1）5 号土坑

焼けておらず、土葬骨である。極めて脆弱であり、骨の分解が進む。頭蓋および左下顎犬歯、歯牙片、歯根部片が認められる。頭蓋は、頭頂部および顔面部が破損しており、頭蓋で性差が現れる眉上隆起・前頭骨隆起・後頭骨隆起・乳様突起など、また年齢推定を行う歯牙の咬耗状況や冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合の縫合状況が確認できないため、年齢や性別に関しての詳細な検討は困難である。ただし、左下顎犬歯が検出され、咬耗が進むことから成年以降に達していると推定され、計測値を權田（1959）と比較すると女性的である。

（2）6 号土坑

焼けておらず、土葬骨である。土塊には頭蓋・下顎・上肢骨が認められ、この他に右上顎骨・右下顎第 2 小臼歯・右下顎第 1 大臼歯も認められる。

頭蓋は、土圧を受けて変形するが、左側を上にする。下顎骨は、右側下顎枝部が上を向き、上肢骨が

下顎骨の下側に位置する。これらの状況から、埋葬後、軟質部が分解した後に動いた可能性がある。

歯牙の咬耗状況をみると、第１大臼歯の象牙質が若干露出する程度であり、第２大臼歯・第３大臼歯はエナメル質が咬耗する程度で象牙質が露出しない。これらの状況から、本人骨は成年～壮年前半程度と推定される。また、性別は計測値を權田（1959）と比較すると男性的である。なお、左上顎第２大臼歯は、遠心部頬側歯頸部に齲蝕とみられる痕跡が観察された。

引用文献

藤田恒太郎 ,1949, 歯の計測基準について . 人類学雑誌 ,61,27-32.

權田和良 ,1959, 歯の大きさの性差について . 人類学雑誌 ,67,151-163.

林　昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.

伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

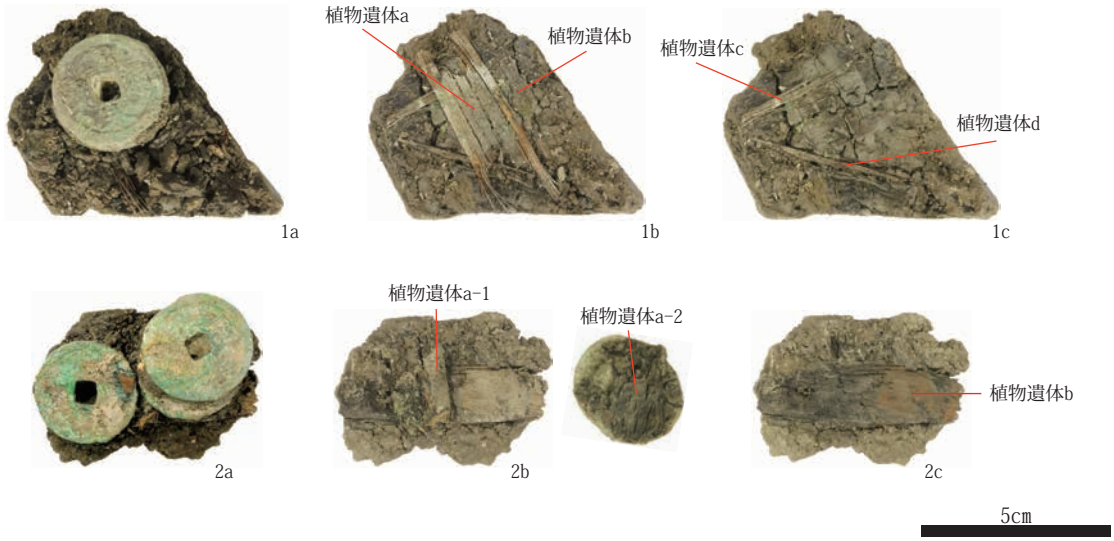
伊東隆夫・山田昌久（編）,2012, 木の考古学　出土木製品用材データベース . 海青社 ,449p.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006, 針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社 ,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.,2004,IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

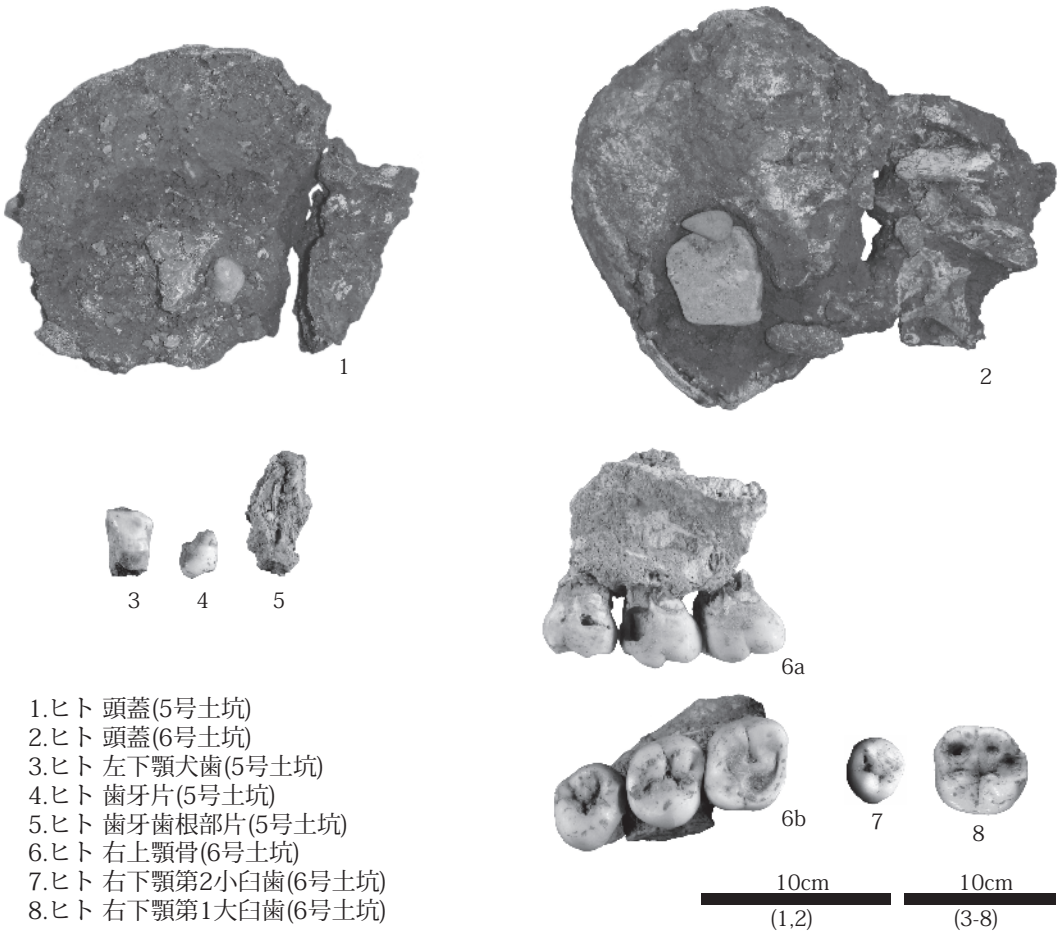
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.,1989,IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

図版１　試料外観および分析試料



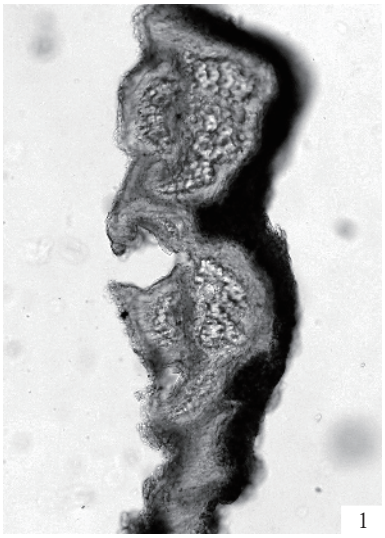
1.5号土坑試料
　a;外観、b;古銭取外し後状況(1面)、c;古銭取外し後状況(2面)
2.6号土坑試料
　a;外観、b;古銭取外し後状況(1面)および古銭裏側、c;古銭取外し後状況(2面)

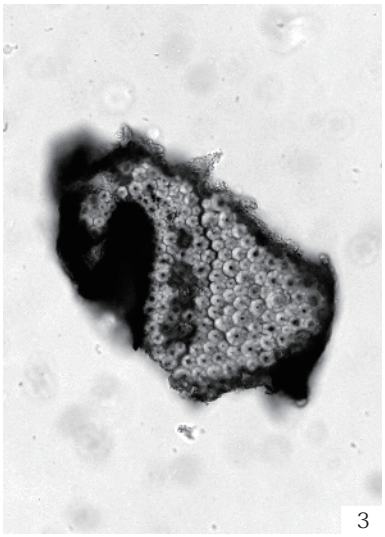
図版３　出土骨

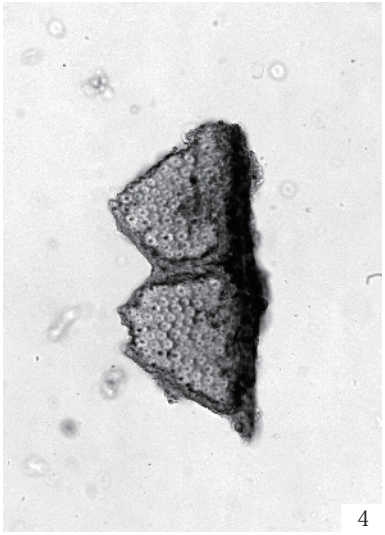


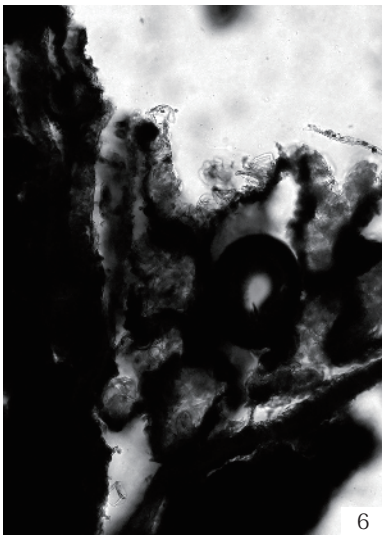
1.ヒト 頭蓋(5号土坑)
2.ヒト 頭蓋(6号土坑)
3.ヒト 左下顎犬歯(5号土坑)
4.ヒト 歯牙片(5号土坑)
5.ヒト 歯牙歯根部片(5号土坑)
6.ヒト 右上顎骨(6号土坑)
7.ヒト 右下顎第2小臼歯(6号土坑)
8.ヒト 右下顎第1大臼歯(6号土坑)

図版２　植物遺体

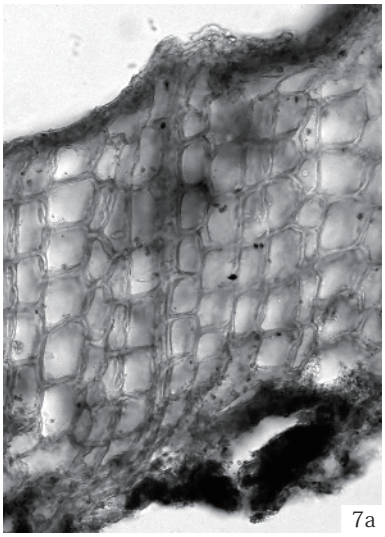


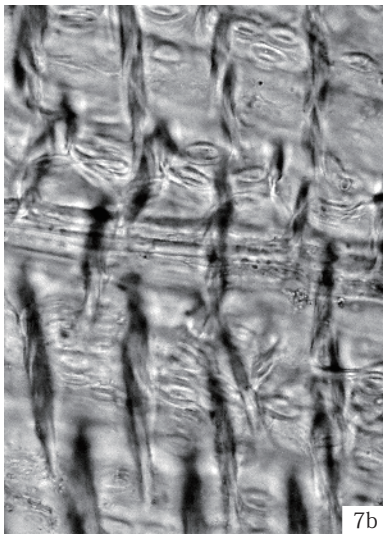






100μm:1-6,7a
100μm:7b





1.草本類(5号土坑;a)
2.草本類(5号土坑;b)
3.草本類(5号土坑;c)
4.草本類(5号土坑;d)
5.草本類(6号土坑;a-1)
6.樹皮(6号土坑;a-2)
7.ヒノキ科(6号土坑;b)
　a:木口,b:柾目

第Ⅴ章　総括

本調査の結果、竪穴建物２軒、溝状遺構５条、土坑 36 基を検出した。本章では周辺で検出されている土坑墓について検討し、能蔵池周辺の歴史的変遷をまとめてみたい。

第１節　土坑墓

本遺跡では人骨が検出された５号土坑および６号土坑が土坑墓と認められる。御勅使川扇状地上の中近世の土坑墓と比較すると、第５表に示すとおり、土坑墓の検出例の多くが野牛島地区に集中している。土坑墓の時期はほぼ 16 世紀代に推定されている中で、今回発見された５号土坑は古寛永通寶が副葬されており、近世初頭 17 世紀の土坑墓が初めて御勅使川扇状地上で検出された。扇状地上で検出された土坑墓の平面形態は、隅丸方形か円形もしくは不整円形を呈し、被葬者は頭を北に向けた屈葬で、側臥方向は西向きがやや多い。５号土坑、６号土坑も隅丸方形で北頭西を向いた側臥の形態をとっている。５号土坑、６号土坑に副葬されていた銅銭の出土状況を扇状地全体で見てみると、28 基中 21 基に副葬されており、銅銭の副葬率が高い傾向にあることがわかる。５号土坑、６号土坑の銅銭で特徴的なのは、銅銭を包んでいたと推測される植物繊維が検出された点である。第Ⅳ章の分析によれば、５号土坑試料がすべて草本類、６号土坑試料には針葉樹のヒノキ科のほか、樹皮、草本類が確認された。５号土坑の植物遺体は、銅銭を納めた植物質資料の痕跡あるいは土坑底面の敷物等に由来する可能性が指摘され、６号土坑の植物遺体は、ヒノキ科で銅銭を納めた容器あるいは木棺等の部材等に由来する可能性が指摘されている。こうした植物遺体は本調査地点の南に隣接する野牛島・大塚遺跡第２地点 12 号土坑でも検出されており[註1]、銅銭の具体的な副葬方法を把握する上で、貴重な調査事例となった。

第２節　竪穴建物と野牛島集落の変遷

野牛島・石橋遺跡は御勅使川扇状地扇端部に立地し、東側には御勅使川の伏流水が湧出する能蔵池が位置する。能蔵池は御勅使川の伏流水を堰き止めて造られた溜池であり、現在では能蔵池の南側に野牛島地区の集落が形成されている。今回およびこれまでの発掘調査成果と文献、地域の伝承から能蔵池周辺の集落変遷をまとめてみたい。

これまでの発掘調査結果から、奈良・平安時代における野牛島地区の集落の中心は大塚遺跡から野牛島・大塚遺跡、立石下遺跡、野牛島・西ノ久保遺跡付近であり（第 12 図）、能蔵池に近接する地域では古代の竪穴建物は検出されていなかった。しかし、今回の本調査前に実施した試掘調査第６トレンチでは、カマドを伴う古代の竪穴建物が発見され[註2]、また本調査ではいわゆるコーナーカマドの竪穴建物が検出されており、遺構は少ないながら古代においても能蔵池西側に集落が営まれていたことが明らかとなった。

中世とりわけ室町時代から戦国時代になると、能蔵池周辺に遺跡や石造物などの野牛島集落の祖形を示す資料が豊富になる。本調査地点および南に隣接する野牛島・大塚遺跡第２地点では、中世の土坑墓や溝状遺構、ウマの歯が出土した土坑などが検出されている。野牛島・大塚遺跡第２地点の東には隣接して室町時代の単制の石幢が見られ、さらにその南東に位置する桃岳院は天正４年（1576）創立（寺記）とされている（第 12 図）。調査地点から南西へ 240 mの地点に安置された「西の神地蔵」と呼ば

	遺跡名 / 地区名	遺構	形状	人骨	性別	年齢	頭方向	顔向き	副葬品・出土遺物
1	石橋北屋敷遺跡	2a 区 14 号土坑	隅丸方形	○	男性的	成人	北	東	
2	/ 野牛島地区	2a 区 15 号土坑	楕円形	○	不明	成人か	北	西	銅銭×6
3		2a 区 16 号土坑	不整円形	○	不明	成人か	北	東	銅銭×6・刀子
4		2b 区 7 号土坑	隅丸方形	○	男性的	成人か	北	西	銅銭×5・かわらけ
5		2b 区 28 号土坑	隅丸方形	○	やや女性的	青年～壮年	北	西	銅銭×1
6		2b 区 32 号土坑	円形	なし			―	―	銅銭×1、甕×1
7		2b 区 55 号土坑	隅丸方形	○	やや女性的・不明	壮年・15 ～ 17 歳	北	―	
8		2b 区 59 号土坑	不整円形	○			北	西	
9		2b 区 104 号土坑	不整円形	○	不明	成人	北	西	銅銭×5
10		2b 区 4 号溝内	隅丸方形？	○	男性	成人	北	西	
11		3 区 5 号土坑	不整円形	なし			―	―	銅銭×3、須恵器坏×1
12		3 区 11 号土坑	隅丸方形	なし			―	―	銅銭×1、かわらけ×3
13		3 区 17 号土坑	隅丸方形	なし			―	―	銅銭×3
14		3 区 23 号土坑	不整方形	なし			―	―	銅銭×1、かわらけ×2
15		3 区 60 号土坑	隅丸方形	○	不明	青年	北	西	銅銭×2
16	野牛島・西ノ久保遺跡 / 野牛島地区	Ⅳ区 23 号土坑	隅丸方形	○	男性	壮年	北	西	銅銭×6・棒状鉄製品×2、不明鉄製品×1
17		Ⅳ区 25 号土坑	隅丸方形	○	女性？	壮年	北	西	銅銭×6
18		Ⅳ区 65 号土坑	隅丸方形	○	男性	熟年	北	西	銅銭×6・棒状鉄製品×2
19		Ⅳ区 82 号土坑	不整隅丸方形	○	女性	成年～壮年	北	西	銅銭×12・かわらけ×1
20		Ⅳ区 88 号土坑	隅丸方形	○	女性	成年～壮年	北	西	棒状鉄製品×2・かわらけ×1
21		Ⅳ区 89 号土坑	隅丸方形	○	女性	成年～壮年	北	西	銅銭×6・棒状鉄製品×1
22	野牛島・大塚遺跡第 2 地点 / 野牛島地区	12 号土坑	隅丸方形	○	女性	壮年	北	東	銅銭×6・棒状鉄製品・粘土ブロック
23		16 号土坑	不整形	○	不明	3～4 歳	―	―	土師質皿
24	野牛島・石橋遺跡	5 号土坑	隅丸方形	○			北	西	銅銭×6
25	/ 野牛島地区	6 号土坑	隅丸方形	○			北	西	銅銭×3
26	六科・村北遺跡 / 六科地区	1 号墓壙	隅丸方形	○	女性か	壮年	北	（西）	
27	村北第 2 遺跡 / 鏡中条地区	SK 0 1	隅丸方形	○			北	（東）	銅銭×6・かわらけ×4、擂鉢×1、香炉×1
28		SK 0 2	不整楕円	○			北	（東）	銅銭×6

※上記以外、形状やその他の副葬品などから土坑墓である可能性のある土坑は他にも存在するが、今回土坑墓として取り上げたのは、人骨もしくは銅銭が出土し、遺構として認識できる土坑とした。

第 5 表　御勅使川扇状地上で検出された土坑墓一覧

れる阿弥陀如来と地蔵菩薩が習合した板碑の銘には、天文十三年の年号とともに「巨麻郡八田庄就中野牛嶋村」と刻まれ、この銘から天文 13 年（1544）には八田庄野牛島村が成立していたことがわかる。能蔵池の北側周辺は「北屋敷」あるいは「古屋敷」と呼ばれ、地元では野牛島集落の発祥の地であると伝えられている。以上のことから、地元に残る集落発祥の伝承は、室町時代以降本格的に能蔵池北西地に集落が展開した状況を反映したものと推測される。

第３節　調査の成果と課題

本遺跡の発掘調査によって御勅使川扇状地北部地域の古代における集落の展開および環境利用について新たな知見が得られた。しかし、能蔵池自体の成立過程や現野牛島集落の中心地域における集落変遷については、調査事例がほとんどなく不明な点が多い。こうした課題を踏まえつつ、今後もさまざまな調査データを蓄積し検証しながら、新たな地域の歴史を伝えていくことが必要であろう。

註

（註１）　南アルプス市教育委員会　2004 『野牛島・大塚遺跡第２地点　発掘調査報告書』 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書　第３集

（註２）　南アルプス市教育委員会　2015 『平成 25 年度埋蔵文化財試掘調査報告書』 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書　第 43 集

第 12 図　野牛島・石橋遺跡周辺の集落変遷（1/5,000）

写　真　図　版

１．遺構確認状況（南から）

２．調査区全景（北から）

３．調査区全景（南から）

写真図版２

１．１号竪穴建物、１・２号溝状遺構、１・２号土坑（西から）

２．１号竪穴建物、１・２号溝状遺構、１・２号土坑（北から）

３．１号竪穴建物カマド（西から）

１．１号竪穴建物カマド断面（北から）

２．１号竪穴建物ピット１（南から）

３．１号竪穴建物焼土

写真図版４

１．１号竪穴建物、１・２号溝状遺構全景（東から）

２．11 号土坑（南から）

３．11 号土坑焼土、炭化物

1．1・13・14 号土坑

2．1 号土坑断面（西から）

3．2号土坑

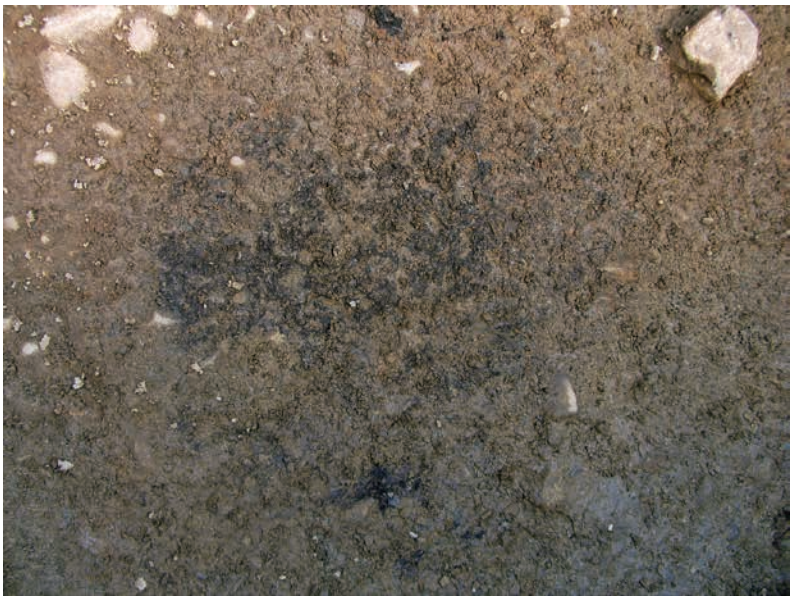
写真図版６

１．調査区北部（南から）

２．２号竪穴建物、３号溝状遺構、３・４・５号土坑（西から）

３．３・４・５号土坑（東から）

１．３号土坑



２．３号土坑底面炭化物検出状況

３．４号土坑

１．５号土坑

２．５号土坑（西から）

３．５号土坑銅銭および植物遺体出土状況

１．６号土坑

２．６号土坑

３．６号土坑銅銭および植物遺体出土状況

1．2号竪穴建物

2．9号土坑

3．7・8号土坑（西から）

1．4・5号溝状遺構（西から）

2．4・5号溝状遺構（東から）

3．4号溝状遺構遺物出土状況（東から）

4．5号溝状遺構（東から）

1．4号溝状遺構遺物出土状況

2．4号溝状遺構（西から）

3．32 号土坑（北から）

1．調査風景

2．調査風景

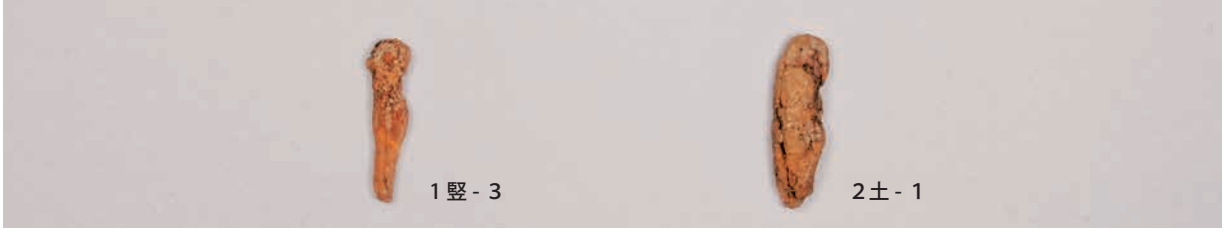
3．調査風景

1．調査風景

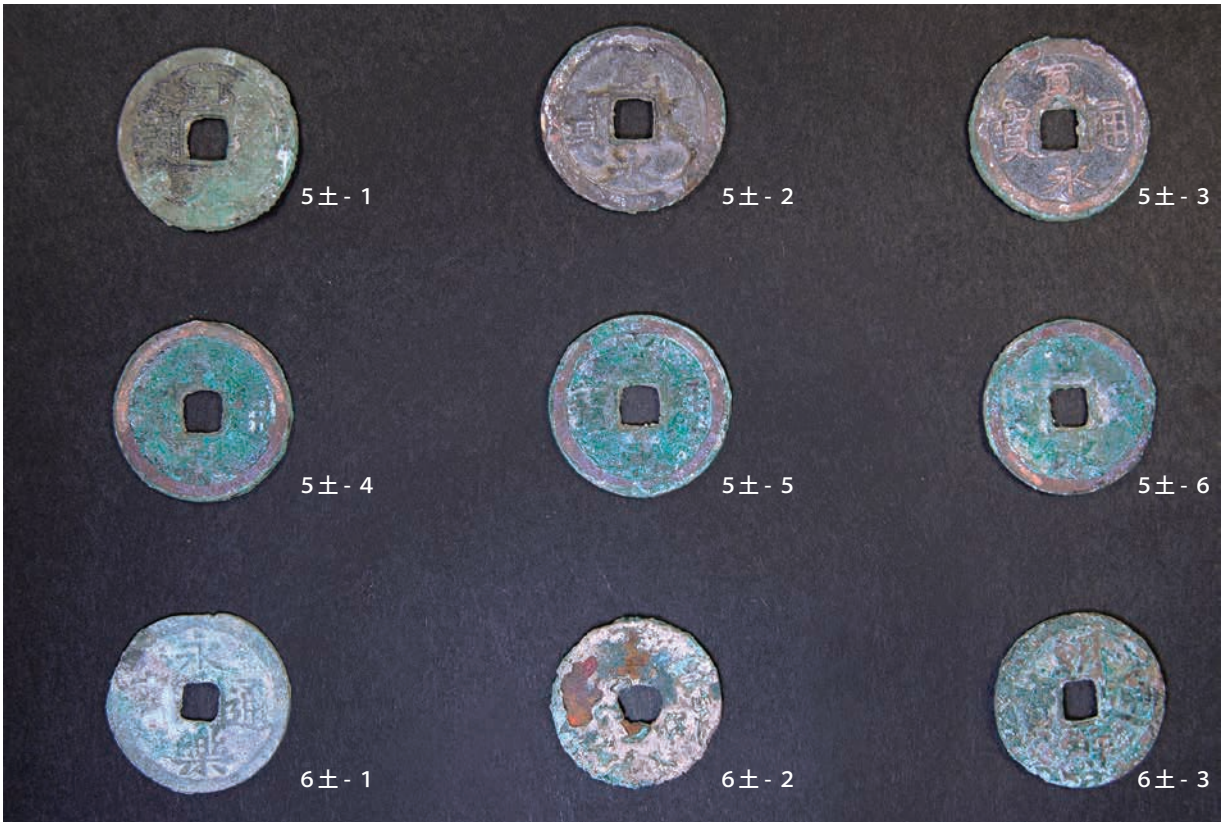
2．調査風景

3．調査風景

1．出土土器



2．出土鉄製品



3．出土銅銭

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	やごしま・いしばしいせき
書　　名	野牛島・石橋遺跡
副　書　名	南アルプス市野牛島 2695 番 1 他宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シ リ ー ズ 名	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 39 集
編　著　者　名	斎藤秀樹
編　著　機　関	南アルプス市教育委員会
所　在　地	〒 400-0492　山梨県南アルプス市鮎沢 1212　TEL055 - 282 - 7269
発 行 年 月 日	2015 年 3 月 31 日

ふ　り　が　な		やごしま・いしばしいせき
所　収　遺　跡		野牛島・石橋遺跡
ふ　り　が　な		やまなしけんみなみあるぷすしやごしま 2695 ばん 1 ほか
所　在　地		山梨県南アルプス市野牛島 2695 番 1 他
コード	市町村	19208
	遺　跡	HT - 18（南アルプス市遺跡番号）
北　　緯		北緯 35°　40′ 7″（世界測地系）
東　　経		東経 138°　28′ 41″（世界測地系）
標　　高		328 m
調　査　期　間		20131016 ～ 20131111
調　査　面　積		216 ㎡
調　査　原　因		南アルプス市野牛島 2695 番 1、2698 番、2699 番 1 番宅地造成工事
種　　別		散布地
主　な　時　代		平安時代・室町～江戸時代
主　な　遺　構		竪穴建物 2 軒（平安時代）、溝状遺構 5 条、土坑 36 基（室町時代）
主　な　遺　物		土師器、土師質土器、棒状鉄製品、銅銭
特　記　事　項		

南アルプス市埋蔵文化財調査報告書　第 39 集

山梨県南アルプス市

野牛島・石橋遺跡

南アルプス市野牛島 2695 番 1 他宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日　2015 年 3 月 31 日

発行者　南アルプス市教育委員会

〒 400 - 0492 山梨県南アルプス市鮎沢 1212

TEL　055 - 282 - 7269

印刷所　株式会社エンドレス

〒 405-0014　山梨県山梨市上石森 123

TEL　0553-22-4574